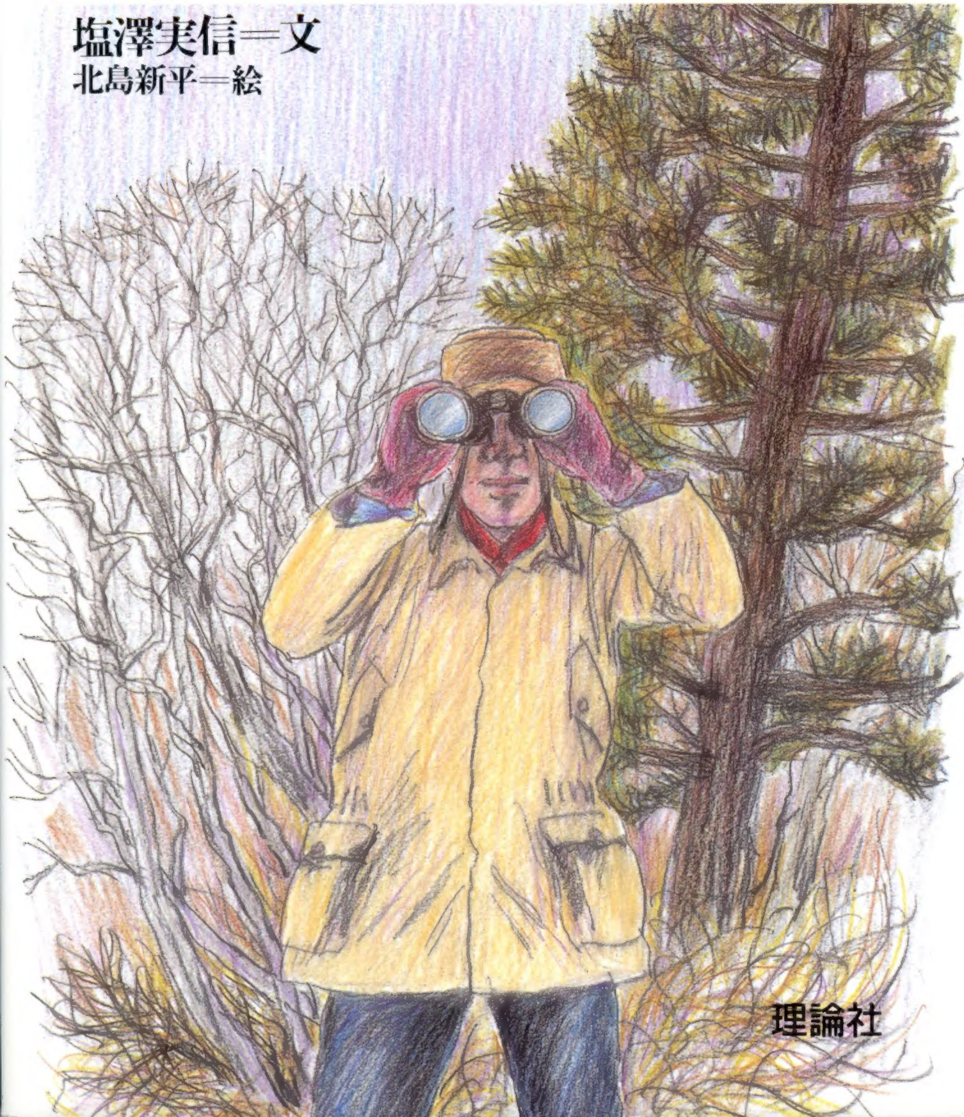
シリーズ＊ヒューマンドキュメント

動物と話せる男

宮崎学のカメラ人生

塩澤実信＝文
北島新平＝絵



理論社

学は絶壁の上からザイルにぶらさがって、岩棚におりた。わずか二畳ほどの出っ張りで、眼下には七、八十メートルの、そぎ落としたような壁がつづいている。
　この岩棚を撮影の基地に決めた。気に入った写真が撮れるまで何日でもがんばるつもりだ。
　学の体は、眠る間も含めて四六時中ザイルで岩にしばりつけてあった。貴重品の水は口をしめらす程度に使い、顔も食器も洗わず、排出物はポリ袋の中へすませた。夢にまで見たイヌワシの撮影のためには、生命の危険と隣り合わせなのだ。
（本文より）

シリーズ＊ヒューマンドキュメント

動物と話せる男

宮崎学のカメラ人生

塩澤実信＝文　北島新平＝絵



理論社



ノスリの親子（宮崎学・撮影）

動物と話せる男

宮崎学のカメラ人生

もくじ

装画・カット／北島新平
ブックデザイン／熊谷博人

1●子リスのコロ



「コロ」と名づけられた子リスは、宮崎家の家族に、とてもなついていた。とくに、北山のモミの木の上に巣を見つけ、子リスをポケットに入れて家へ連れてきた学少年には、親リスに近い甘えをしめしていた。

朝起きると、学はコロにビスケットやヒマワリの種をあたえるために、大きな声で、

「コロや」

とよびかける。

するとコロは、巣箱の金網に前あしの爪をかけて、小さな頭を押しつけ、丸い目を生

き生きと輝かせながら、

「グクッ！」

と、ノドの奥で鳴き声をあげる。

学が巣箱の扉を開けると、コロは褐色のゴムマリが跳ねるようにとび出してきて、少年の腕から肩へとかけあがり、餌をあたえると、小さな前あしで拝むようにつかみ、せわしなく口を動かして、夢中で食べるのだった。

コロはひとしきり餌を食べて満腹すると、ふさふさしたしっぽをピッピッとふりながら部屋じゅうをとびまわり、学の手にじゃれついたりした。

そして、上着の袖口から袖のなかにもぐりこむと、腕をつたって首すじまでかけあがり、はずむようにとび出すと、こんどは机の上にのって、鉛筆をくわえ、本箱の裏へ運びこんでしまった。

「コロ助、鉛筆をかくしちまっちゃだめだに」

少年が、本箱の裏から鉛筆をとり出していると、子リスは消しゴムを、鋭いノミのような前歯でかじりはじめていた。

「これこれ、コロッ！」

鉛筆一本、消しゴム一つも、貴重品であった。少年はあまり豊かではない生活のなかから、やりくりして買ってくれた大切な文房具を、コロにかじられたり、かくされてしまうのに閉口しながらも、片ときも目をはなせない小動物の機敏な動きを、目を光らせて見守っていた。

人間の赤ん坊の遅々とした育ちにくらべて、子リスの育ち方は、まったく目を見はる早さだった。学少年が、一つ年上の従兄弟と、その友だちの斎藤君と三人で、北山のモミの木の上にリスの巣を見つけたのは、四月二十九日のことだった。

枝がいっぱいに張った、暗い感じのする木だったが、斎藤少年が、

「その木によくリスの巣があるんだ」

と、密生した枝のあたりをあおいでいった。

小鳥の巣を発見する名人だった学は、斎藤君のその言葉を聞くと、モミの木からはなれて道のほうから、じっと目をこらして、暗い枝の茂みのあたりをのぞいてみた。茂みのなかには、なにか黒いような丸いものが見え、それはあきらかに、枯枝を敷きつめたリスの巣のようだった。

「あっ、巣があるに」

学は、第一発見者の誇りをこめて、たかぶった声でさけんでいた。友だちも、すぐ枝の上の黒い固まりを見て、

「たしかにある！」

といい、あらためて目をこらして見た。巣のなかには、なにかが動いている気配だった。

「リスがいるようだに。のぼってみまいか」

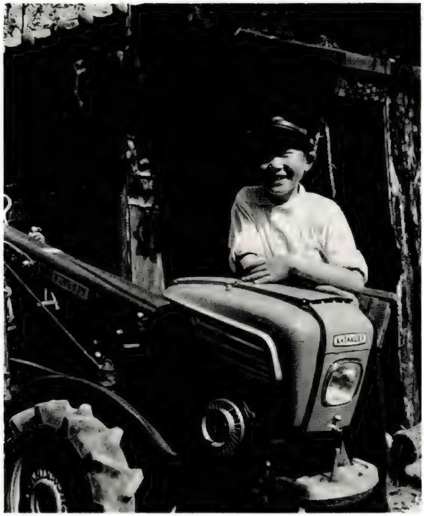
斎藤君と従兄弟はそういって、モミの木にのぼりはじめた。学も、二人につづき木にのぼっていったが、巣のなかには、褐色の毛におおわれた子リスが二匹、抱き合うようにしてうずくまっていた。

分け前の優先権は、一つ年上で先にのぼっていった斎藤君と従兄弟にあった。動物好きの学少年にとって、分け前にあずかれないのは、なんとも残念だった。二人の少年が子リスをてのひらに乗せ、顔に小動物のぬくみをたしかめるようにして、山をくだるその後を、学は半べそをかきながら帰路についた。

三人のなかで、家がいちばん近い斎藤君のところに立ち寄ったが、手のなかの小動物に気がついた母親は、

「なにをとってきたんな……子リス？　坊や、かわいそうだて逃がしてやりなんよ」

というのだった。
学はその言葉を聞くと、内心「しめた」と思った。
もしかしたら、もらえるかもしれない。
……案の定、斎藤君の母親は、ひとりだけ手ぶらで、泣きそうな顔をした学に目をやると、
「学さがもらっとらんで、学さにやれやれ」
と、せきたてるようにいってくれた。
学少年の動物好きは、近隣にひびきわたっていた。学校の勉強は二の次に、野鳥のヒナを巧みに育てている学のことは、大人のあいだでも話題になっていた。
斎藤君は、母親の言葉にしたがって、
「学さにやらず（やろう）」
と、渡してくれた。
あたたかい小動物の感触をてのひらにつつむと、学の顔は一気に明るくなった。
「ふんとうにくれるの、すまんなァ……」
学は、相手が心がわりしてはたいへんと、すぐ、



コロと遊んだころの学少年

「あんば（さようなら）」

とさけんで、子リスを上着のポケットに入れ家へとんで帰った。

夕闇が山ひだをつつんで、家には電燈がともり、新聞配達の仕事で朝の早い父の祥夫は風呂に入っていた。末っ子の学に野鳥のつかまえ方をあれこれ手ほどきして、自分もまた動物好きの父親に、少年はまず許しをもとめた。

「おとうちゃん、リスを飼ってもいい」

父親は、赤銅色に焼けた顔を、手ぬぐいでふくと、機嫌よく、

「だいじに飼うなら、飼ってもいい」

といった。

学はその言葉に勇気をえて、すぐ上着のポケットから子リスをとり出し、てのひらに大切につつむようにして、「ほら……」とさし出してみせた。

子リスは、風呂場にたちのぼる湯けむりと、ムッとしたあたたかさに、おじけづいたのか、丸まっちい体をさらに小さく縮こまらせて、学の手のなかでふるえていた。父親は、その小動物に目をとめると、

「なんだ、へえ（もう）もっとるのか」

と、笑った。

母親も、台所から顔を出し、

「ほお……かわいいじゃ」

と、やさしい笑顔でいった。

母のよしゑは、機転のきく人だった。ある年のクリスマスのとき、学が「お母ちゃん、ケーキが食べたい」というと、その夜、新聞紙につつんだものをドサッと置き「さあ、お食べ」とすすめた。

開いてみると、新聞紙の中身はたくさんのまんじゅうだった。学はそれを見て不服げに、「なんだ、まんじゅうか」というと、母は、「クリスマスって西洋のお祭りだからケーキだが、日本のケーキはまんじゅうだから、それでいいんだに」といったものだった。

子リスをこの父と母に見せ、飼う許しをえた学は、さっそく綿で巣をつくった。そして、家に飼っているヤギの乳をしぼり、小皿に入れて近づけてみると、よほど腹が空いていたのか、小皿のへりに前あしをかけて、ぴちゃぴちゃと音をさせながら飲みはじめた。

翌日、学少年はヤギの乳を飲ませたうえで、子リスをポケットに登校した。五年生の教室に、突然の小動物の入学は、先生と生徒をよろこばせた。先生は「かわいいね」と、自慢のカメラで写真を何枚もとってくれた。

子リスは、ゴムマリのようにコロコロしてかわいらしいので「コロ」と名づけられた。コロは、授業中は机の中へ入れておいた。

ある日、牛乳とビスケットを持って登校し、一緒に入れておくと、ガリガリと何かをかじる音がつたわってきた。

そっと机のフタをあけてみると、コロがビスケットをせわしなく食べている。

学はとっさに、

（これはうまいぞ）

と考えた。それは、コロの食事は、その度ごとにヤギの乳とか牛乳を小皿に入れてやっ



ていたのに、これからは固形物の餌で間に合うから、めんどうくさくなくなると、子ども心で計算したのだ。

コロは学校でも、目まぐるしく走りまわって、ハラハラさせた。いたずらがすぎて、ちょっと怪我をしたことがあったが、悲しそうに泣いたのは、学少年だった。

クラスきっての悪童が、子リスの怪我に泣く姿を見て、

「学さが、あんなに泣くなんて、へんだなァ」

と、不思議そうに眺めていた。

ガキ大将、学少年の走りまわった校舎は、中央アルプスをのぞむ南アルプス山麓にあった(当時の中川東小学校)。

2● ヘビにのまれたコロ



学少年に馴れた子リスのコロが、近くの四宮神社に引っ越しさせられたのは、飼いはじめて二ヵ月ほどたった六月二十七日の夜だった。

昭和三十六年六月、二十四日から降りはじめた雨は、伊那谷から諏訪、木曽地方の局地的な集中豪雨となって、何日も降りやまなかった。

南アルプスと中央アルプスの狭間をぬって流れる天竜川の両岸に、段丘となってひろがる伊那谷は、バケツをひっくりかえしたように降りそそぐ大雨で、山はくずれ、田畑は各地で流され、河畔の家は、氾濫した天竜川の濁流に、つぎつぎにのみこまれていった。

裏山に千数百メートルの陣馬形山をひかえた学の家も、この豪雨によって、いつ山くずれにおそわれるともわからない、危険な状態になった。
有線放送は、村の危険がせまった地区の地名をあげて、
「桑原地区の堤が切れますから、至急、避難して下さい」
「かつら島の堤防が決壊しそうです。至急、応援に来て下さい」
と、緊急放送をつづけていた。
村のあちこちで、山がくずれ、堤防が切れはじめたことは、学の家の裏山もいつくずれ落ちるかもしれぬ、危険信号だった。
「今夜あたりが危ないに。できるだけ荷物を持って、お宮へ逃げないと……」
隣近所、声をかけあって、宮崎一家はあらかじめ避難場所と決めてあった四宮神社へ、はげしい雨のなかをのがれることにした。
学少年も、両親や兄姉たちと、教科書をつめたカバンとわずかな身のまわりの品を持って、懐中電燈の光をたよりに避難をはじめたが、学は家を出てしばらくしたとき、
「おかあちゃ、ちょっと待っとってくんな。コロを連れてくるのを忘れたで」
と、泣きべそまじりにいった。

「なんだと、コロを連れに行く？　いまそんなのん気なことをいってるときじゃねえ」

先頭に立つ父親の叱咤の声が聞こえてきたが、母親は、いい出したらきかない学の性格を案じて、小声でいった。

「わしがここで待っとってやるで。急いで連れておいな」

学少年は、母親の声を背に、すぐとって返し、コロの巣箱を抱えるようにして、どしゃぶりのなかをもどってきた。コロは、動物のもつ鋭いカンで、外部の異変を予知したかのように、巣箱の片隅で小さくなっていた。

長野県南部で、死者行方不明百三十六人、負傷者千百六十四人を出した局地的豪雨は、三十日午後までに五百ミリ余の雨を降らせ、被害総額は三百三十七億円にものぼる大災害をもたらした。学少年の上伊那郡中川村だけでも、小渋川上流の四徳分校が崖くずれで崩壊したほか、村内各地で家や田畑は流され、いたましい犠牲者も出た。

さいわい学の家は無事で、雨がやむともどることができた。持ち運んだ荷物もおいおい元にかえされたが、コロの巣箱だけは社務所の軒下に置くことにし、朝夕、学が餌を運んでやる生活に変わった。

それからのコロは、学がやってきて「コロや」と声をかけると、「グーグッ」と鳴き、

金網のところへ走り寄って顔を押しつけ、それから学の手をなめて、挨拶をするのが習慣のようになった。

学は、金網ごしにコロの小さな舌で手をなめられ、餌のヒマワリの種やビスケットをさし入れながら、彼とリスだけに通じる友情を、たしかめあう毎日になった。

セミしぐれのはげしい七月中旬のある朝、学はいつものように、「コロや」と声をかけながら、餌を手に巣箱へ近づいていった。いつもだと、学の足音を聞いただけで、巣箱のなかでは、ゴトゴトとコロの走りまわる音が聞こえたのだが、その日はコトリとも音がしない。

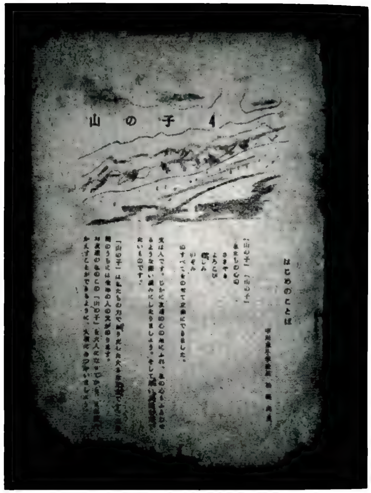
「コロや……コロ助……」

学少年は、一瞬、いやな予感がして、巣箱をのぞいた。小動物の排泄したものが、真夏の暑さで発酵してぷーんと鋭く鼻に立ちのぼってきたほかは、巣箱のなかはからっぽになっていた。餌を入れてやる扉に不自然なすき間があったが、コロはそのせまいとこから逃げ出した気配はなかった。

「コロ！　コロッ！」

学はセミしぐれの森にむかって、大声をあげてみたが、セミが一とき鳴きやんだほか

は、きわだった変化はなかった。
「コロがいない……」
学少年は、そうさけぶとワッと泣き声をあげて、家へ走って母親に助けをもとめた。二人でとって返し、森のなかをさがしていると、社務所の屋根に、大きなヘビがゆっくりはっているのが見えた。学はハッとして、棒を拾ってくると、その棒でヘビを下からつつき落とそうとした。だが、ヘビは少年の力で、落とすことは難しかった。母子の騒ぎ声を聞いた父親もかけつけて、棒でつつくと、ヘビはかま首をもちあげ、父親にとびかかる体勢をとった。
「おとうちゃん、あぶない!」
学は夢中で、危険を知らせた。
父親は、そのかま首をめがけて、力いっぱい棒をふりおろしたが、ヘビはその一撃でどさっと地面に落ち、尾を小きざみにふるわせはじめた。一メートルあまりはあるヘビだった。見ると、胴の真ん中あたりが、マリをのみこんだようにぷっくりふくれあがっている。
「やっぱし、コロをのんだんだな!」



コロと別れた悲しみを学は文集につづった

学少年は、とっさにヘビの腹を切り裂き、コロの救出にかかった。裂かれた腹のなかには、血まみれのコロがのみこまれていた。だが、あの機敏に走りまわっていたコロの頭のあたりは、毛が抜けて白くふやけ、もうとけはじめていた。

「コロが死んじゃったァ……」

学はその無惨な姿を見て、大声をあげて泣きはじめた。父と母がどんなになだめても、学少年は泣きやまず、そのまま家へもどってくると、軒先にかごに入れて飼っていた野鳥を、つぎつぎと大空に向けてはなしはじめた。それらの野鳥は、学がヒナのころから飼い育てた大事な宝物だった。

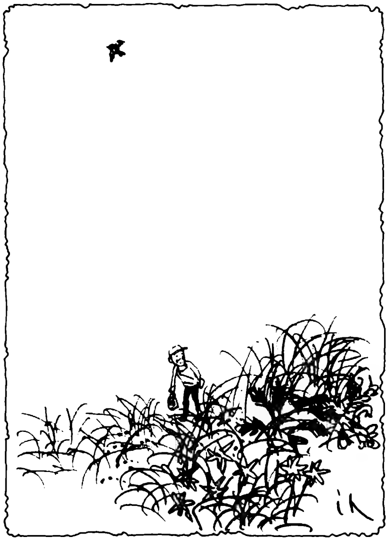
ハトぐらいの大きさで、頭と羽根の部分にルリ色のシマ模様のあるカケス、毛羽根の薄よごれたようなヒヨドリ、機敏な動作をくり返しながら、カゴの中でもんどりうって飛ぶヤマガラ……。どの野鳥も、学が親鳥のようになって、餌をあたえて育てていた野鳥だった。

それを、いま大声をあげて泣きながら、
「もういやだッ！　鳥も動物も飼うことはこりごりだ！」
と、おしげもなく野にはなしているのだった。
両親は、学のそのはげしい嘆きと怒りをなぐさめる方法もなく、見守るほかはなかった。学もまた、父親と母親に、その心の変化をどのように説明していいのか、子どもの限られた言葉では、とてもいいあらわしえない気持であった。
いまになっていえることは、野生動物を飼うことの無慈悲さに、いたく反省させられたあげくの行動だったのだ。そのときの学の考えは、かわいがって飼ったところで、野生の生きものは、野生のままでいるのがいちばんいいのではないか、というものだった。
子リスのコロにしても、せまい巣箱に閉じこめられていなかったら、アオダイショウなどにのみこまれることはなかっただろう。あの木から木へ、枝から枝へと、体と同じぐらいの尾で巧みにバランスをとりながら、ピョンピョンと機敏にとびまわっている野リスが、ヘビにおそわれて、みすみすのみこまれるはずはないのだ。
また、宝石のような美しい羽根をしたオオルリや、キビタキ、ルリビタキなどの小鳥が、人間にとらえられてせまいかごに入れられたとたん、その羽根の色はかがやきを失

い、鳴き声にも澄(す)んだひびきが感じられなくなってくる。
学校の勉強より、野鳥の観察のほうが好きで、何時間でもあきずに、彼(かれ)らのさえずりや行動を追っていた学少年には、野の生きもののその変化を、充分に感じとっていたのだった。



3●伊那谷(いなだに)の自然



宮崎学の生まれた伊那谷は、山河(さんが)が学校であり、野鳥や野生の動物がクラスメートのような環境(かんきょう)にあった。野生動物が多かったのは、西側に中央アルプス、東に伊那山地、およびこれに平行して走る南アルプスがそびえ、その中間に諏訪湖(すわこ)に発して、遠く太平洋へとそそぐ天竜川(てんりゅう)が流れる大自然にめぐまれていたからだった。

谷は南北におよそ六十キロもあったが、屏風(びょうぶ)のようなけわしい崖(がけ)にはばまれた東西は、四十キロだった。この谷間に、上伊那と下伊那の二つの郡がすっぽりとおさまり、天竜川の両岸ぞいに、山部へむかって階段状(かいだんじょう)に高くなっていくそれぞれの河岸段丘(かがんだんきゅう)で、人々

は農業を営んでいた。

学少年の生まれ育った村は、この伊那谷のほぼ真ん中あたりの上伊那郡中川村だった。ふるい村名は南向村といったが、いまは村の中心を、天竜川が流れているところから中川村と名づけられていた。学の家は、川の東側で、南アルプス山系につらなる端山の南側中腹にあった。

昭和二十四年八月十日が誕生日で、学は四人兄姉の末っ子だった。五つ上の長兄延彦と次兄寿光が双子で、三つ上に姉の京子がいた。父祥夫は分家で、これという土地も屋敷もなく、学が生まれたころは、村内をはじめ近くの村々へ、新聞を配達していた。

古ぼけた自転車が、父の仕事をささえる唯一の資本であった。あとは、若いころ、長距離とアマチュア競輪選手としてきたえた強じんな足腰がたよりで、自転車の荷台にたくさんの新聞をくくりつけ、契約している家に一軒一軒配達して歩く毎日であった。

父の新聞配達収入と、母親がネコのひたいのようなせまい農地をたがやして、わずかばかりの農作物をえるだけの一家の生活は、決して豊かなものではなかった。

学少年の楽しみは、父がチラシのあまりや、山川惣治の「少年ケニヤ」が連載されている新聞を、持ち帰って来て、毎晩フトンのなかで読んで聞かせてくれることだった。

「少年ケニア」は、和製ターザンのようなすじだてで、アフリカの猛獣たちがリアルなタッチで描きこまれ、胸のわくわくするようなストーリーがそえられていた。

小学校入学前の少年に、父親の読んでくれる冒険物語と、荒々しい猛獣の絵は、虚実が一体となってせまってきた。自分がライオンや巨象を自由自在に動かしているような気持にかきたてられるのだった。

学少年の遊び相手は、本家の一つ年上の従兄弟・義文であった。彼は昆虫やカエルといった、そこいらで容易につかまえられる生きものが好きだった。家の周辺には、小川やため池、雑木林が点在していた。竹で編んだセセリとよぶ道具を持って、水辺に行けば、小ブナやドジョウ、モロコといった稚魚は、たやすくすくうことができた。

クワガタや、土地で紙切り虫とよぶ昆虫。ハチ、クモ、カエル、ヘビが家の周辺で簡単につかまえられたし、森には野鳥が、さえずっていた。

農家のどの家も、春から秋にかけてカイコを飼っていた。伊那谷をうたう「伊那節」の一節に「桑の中から小唄がもれる……」とか、「蚕こわがる子は産まぬ……」といったカイコに関する言葉がちりばめられてるが、カイコはこの谷間に生きる人々の大切な現金収入への道であった。

赤子のときから、この〝おカイコさま〟とともに育っている伊那の子どもは、都会っ子がきらう虫が遊び友だちだった。たとえば、ハチの巣を見つけると、棒の先で巣をつついて落とし、その巣のなかにびっしりとつまった幼虫を、一匹ずつ引っぱり出して、平気でのみこんでしまった。地バチの幼虫が佃煮にされ、珍味としてよろこばれる土地柄であった。

学少年が、家のまわりの虫やカエルから、小鳥に興味の対象をうつしたきっかけは、母と二人、近くの畑へでかけたことからだった。そのとき、畑の土手から、人間の気配におどろいて飛び立った小鳥がいたのである。スズメによく似た乾いた土のような色の小鳥だった。

「おかあちゃ、鳥だに！」

学はびっくりして、かん高い声をあげ、いま小鳥が飛び出した場所をよく見ると、そこに枯れ草や枯れ茎で巧みにつくった皿形の小さな巣があった。

「学、これがヒバリの巣な」

母は、目を丸くして見入る学に、春先き、澄みわたった空高くさえずるヒバリの巣であることを教えたのだった。

生まれてはじめて見る小鳥の巣だった。巣のなかには、細かい黒褐色の斑点がある卵が四つ、細くとがったほうを中心にむけてならんでいた。

「卵が四つもある！」

「かわいい卵ずら……学、この卵はとっちゃあだめだに」

母は、ヒバリの巣をひととおり見せると、そういいおいて野良仕事に行ってしまった。

生まれてはじめての体験で、すっかり興味をもってしまった学は、母親とわかれると、すぐ、家へ走って帰り、従兄弟の義文を連れて畑へとって返した。

「文ちゃ、ひばりの巣を見つけたに」

学は、得意げにいって、従兄弟とふたたびのぞきに行った。皿形の精巧に編みあげられた巣と、そのなかの四つの卵は、少年たちのいたずら心を動かさずにはおかなかった。母親に、とってはいけないと注意されていたが、見事にみがきあげられた宝石のような卵の前に、その言いつけは力を失っていた。

「二つずつわけまいか」

どちらともなくそういって、二人はその卵を二個ずつわけあい、そっと握って帰宅した。卵の一件は、野良から帰った母親に、すぐ知れてしまった。



学少年の生家からは中央アルプスが一望できた

「なんちゅことをしたの！この子は」

母は、きびしい声で学を叱り、怒りをいっぱいにした目でにらみつけた。いつにない母の怒りに、おびえきった学の手のなかの卵は、もろくも割れてしまった。すると、すきとおった白身と、小さな黄身が、手のなかにひろがり、生ぐさい匂いが鼻をついた。

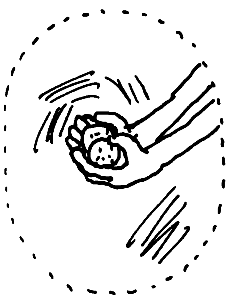
学は、卵の殻のあまりの薄さと、もろさ、そして黄身の小ささに目を見はった。学がそれまで知っていたのは、ニワトリの卵だけだった。

〈鳥の卵でも、こんなにちがいがあるのか〉

幼い学であったが、それは実物と、母親の叱咤の下で知った新鮮なおどろきだった。

野鳥の巣との次の出会いは、五歳になったころのことだった。発見したのは、波状にチチンチチンと鳴きながら飛ぶ、腹のあたりが黄色のキセキレイと、河原や農耕地に群

れをなしているクチバシの短いカワラヒワの巣だった。
キセキレイの巣は、近所の農家の防風林となっているヒノキの生け垣の茂みに、馬の毛や髪の毛をつかい巧みに編んだようにつくってあった。カワラヒワの巣は、高い杉の木の上にあったが、どちらも木のぼり遊びをしていて発見したものだった。
二つの巣には、小さな卵があった。
卵は、発見者の戦利品となったが、これもまた、すぐ割れてしまい、学の手を汚しただけに終わった。
しかし、学はこのときも、新しいおどろきに目を見はる思いがした。それは、ヒバリの巣は地上だったが、キセキレイやカワラヒワは木の上にあり、しかも巣の材料がそれぞれにちがっていたこと、卵の色も鳥によって異なっていることなどだった。



4●山と川に学ぶ



伊那谷の少年たちの遊び場は、山や森、小川やため池、河原、神社やお寺の境内などだった。裏に山を背負った学少年は、その裏山を縄張りとし、そのほかに近くのお宮や、墓地、ため池が遊び場になっていた。

木のぼりの上手な学は、裏山の森の木の上に小屋を作り、敵と味方にわかれて、インディアンのように矢を飛ばしあったり、ターザンのように、枝から枝へとび移ったりする危険な遊びを好んだ。

学校の勉強は、熱心ではなかった。家に帰ってくるとカバンをほうり出して、近所の悪童たちをさそって、森へ行ったり、小川へ行ったり、暗くなるまで遊びに精を出して

いた。
　しかし、その荒々しい遊びのなかで、学は鳥や動物には、異常なほどの興味をしめす少年だった。春から夏にかけ、野鳥は子育てのシーズンに入るが、学は遊びのさい中でも、小鳥の巣を、誰よりも早く発見する独特なカンをそなえていた。それは、野鳥の鳴き声で彼らの動向を読むことができたからだった。
　たとえば、どこでも見かけるキジバトは、「テテッポッポ、テテッポッポ」とくぐもった声で鳴いているが、自分の縄ばりに侵入した鳥がいると、「クッ、クッ」と鋭く、威嚇の鳴き声をあげる。また、巣場所へ雌を呼ぶときは、いかにも甘い声で「グッー、グッー」と鳴くので、その声の近くへ行くと、枯枝を敷きつめただけのお粗末な巣が発見できるというわけだった。
　どの野鳥にも、感情をあらわす何種類かの鳴き声、はばたき方、動作があった。それを学は人知れずよく観察をしていたのだ。その観察を通じて、どうしてもわからないカラスの行動があった。
　それは、毎年秋から冬にかけて、夕方になると、学の家の上空を黒い流れのようになったカラスが、北から南へむかって飛ぶことだった。何千羽というカラスの大群だった

が、この群飛は、そのシーズンになると毎夕くり返された。

「伊那谷じゅうのカラスが、見合いに集まってくるんだに」

年よりたちは、カァカァと耳うるさく鳴いて、羽音をきしませて飛ぶ大群を目で追いながら、集団見合いがこの時期に、中川村の山で開かれるという説をつたえていた。

つるべ落としの秋の夕日を黒い背にうけ、真っ赤にそまって山へ飛んでいく情景は、一瞬息をのむほどの美しさだった。伊那谷は、南アルプスの側から太陽がのぼり、中央アルプスのむこう側に日が沈むのだったが、朝日が赤石山脈の上にのぼると、竜西側の空木岳、桧尾岳、宝剣岳、中岳、駒ヶ岳につづく高い峰々が、黄金色にそまって、ピラミッドの先端のような鋭い稜線をくっきりと浮かびあがらせるのだった。

その黄金色の光は、刻々と麓へむかって端山から台地、里の村々へとかけおりてきて、またたく間に、伊那谷全体を金色にそめてしまうのだった。

夕方は、この逆の形でやってきた。陽が中央アルプスの彼方に沈んでいくと、群青から黒色へと色合いを増す薄暮が、麓の谷から丘、端山へと、はいのぼっていって、西の谷を黒い夜のとばりに閉ざしてしまうのだった。だが、谷の東側の南アルプスの仙丈ヶ岳、北岳、塩見岳、赤石岳といった三千メートル級の高い山々は、鋭い稜線をあかね色

にそめて、いつまでも暮れ残っていた。
南アルプスの麓に位置した、竜東の村々はもう薄墨色の夕闇にとざされているのに、山脈のいただきは、しばらくの間は夕陽の影を残している……。
学は、生まれてこのかた、朝夕にくり返されるこの壮大な光と影のおりなすページェントを眺め、知らぬ間に記憶の底へしっかりと焼きつけてしまっていた。
後年、ポジティブとネガティブの写真の世界にかかわる人生となるが、生まれたときから、伊那谷のこの自然条件のなかに、どっぷりひたっていたことが、学にとってどれだけの力になったかはかり知れなかった。
この大自然があたえてくれた〝天恵〟とともに、動物写真家となる宮崎学を決定づけるエポック・メーキングなできごとが、小学校三年の秋にやってきた。
ある日のこと、双子の兄たちが、どこからか名前のさだかでない野鳥をもらってきたのである。
せまい鳥かごのなかで、チッ、チッと神経質に鳴きさけびながら、敵意むきだしにあばれまわっている、スズメくらいの小鳥だった。
羽根は薄茶色で、美しい鳥とはいえなかったが、頭のいただきに羽冠がチョボチョボ

とのっかっているのが、めずらしかった。
「学、お前、この鳥の名がわかるか」
兄は、もらってはきたものの、名の知れぬ野鳥をもてあましたように、生きものにくわしい弟に問いただした。
「さあ、なんずらかなァ。ホオジロに似ているけど、羽根の色がちがうし。オオジュリンつう鳥にも似ているようだし……」
学は、いちども見たことのない野鳥を前にあれこれと考えてみたが、どの鳥にも頭の部分に、逆立ったような冠はのっていなかった。
「学がわからんじゃ、誰もわからんぞ……」
兄たちは、なかばあきらめたようにいい、
「まあ、せっかくもらってきたんだし、大事に飼わまいか」
と、米粒と水と、菜の葉を細かくきざんで巣箱に入れ、家の軒下につるした。
その翌朝、学はいつもより早目に小学校へ登校すると、すぐ図書室へ行って『野鳥図鑑』を借り出し、熱心に調べてみた。
スズメとかホオジロといった項目をめくって、昨日の野鳥のイメージと照らし合わせ

ていったが、そのなかに、ホオジロ科カシラダカというところがあり、頭上に羽冠をのっけたスズメ大の野鳥が描かれていたのだ。

「あった！　カシラダカっつうんだ……」

はじめて知る野鳥の名だった。

そのころには、冬鳥として日本には十月中旬ごろやってくること、夏と冬で羽根の色が変わること、雄にも雌にも羽冠があることなどが説明されていた。

学は、その日の授業をうわの空でうけると、家へ走るようにして帰り、いまいちど、巣箱のなかでバタバタ飛びまわる野鳥を観察してみた。図鑑にあるとおりの特徴をそなえ、羽根は冬羽の薄茶色にそめられている。

学は二人の兄たちが前後して帰ってくると、目を生き生きとさせて、

「おにいちゃ、あの鳥なア、カシラダカっていうんだ。羽根の色が夏と冬で変わる渡り鳥で、ホオジロの仲間だから、ヒエやモミで飼うことができるんだって……」

と、うれしそうに報告した。

「カシラダカ？……こんなちっぽけの鳥がタカなんて名がついていて……」

上の兄は、不審そうにいったが、すぐ兄たちは、

「でも、この学がいうんだから間違いないずら」

と、こと鳥に関する限り、弟の言葉に間違いのないことを認めるのだった。両親も、野鳥の出自があきらかになったカシラダカを飼うことを、快く許してくれた。

〈学がいうんだから間違いない……〉

兄たちがこのときにいった言葉は、子ども心にもジーンと響いた。勉強には熱心ではなかったが、けものや小鳥については誰にも負けないぞといった自信のようなものが、フツフツと心のなかにたぎってくるのを感じた。

それにしても、学校の図書館で見た『野鳥図鑑』の見事な絵と説明。いままで見たこともない鳥の数々の美しさが、学の心をとらえてはなさなかった。

「あんな図鑑を自分も持てたならなァ」

学少年の心を占めた図鑑への想いは、日に日に重いものとなっていった。

「よし、なんとしても買ってやらず。そのためには、小遣いをためるんだ」

豊かではない家庭で、学の月々にもらう小遣いはしれたものだった。しかし、図鑑への一念は、他への欲望を一切断ちきった。

ある大手の出版社から刊行されている鳥の図鑑が、ようやく買える金額にたっしたの

は、二年後の小学五年生のときだった。

しかし、図鑑を買うためには、当時赤穂（現在の駒ヶ根市）といった二十キロほどはなれた町の玉屋書店へ行かなければならなかった。村の停留場からバスに乗り、飯田線の飯島町で降り、そこから電車に乗って赤穂まで行く道順だった。バスは朝夕に一本しか通らず、電車も一時間に一本程度の単線であったから、一日がかりの大旅行だった。忙しく働いている両親にたのんだところで一日のヒマをさいて、図鑑のために町までとても行けない相談だった。結局、学自身が行くよりほかはない。

学は、その日までに一人でバスと電車をのりついで、赤穂まで行った経験はなく、緊張で目はひきつっている感じだった。

玉屋書店は、赤穂の駅前通りにあった。少年は、学校図書館の何十倍もの、色とりどりの本が並んだ書店のなかへ、おずおずと入っていくと、動物や鳥の図鑑が並べてある書棚の前へ行き、はやる胸をおさえて目ざす図鑑を手にとった。

それは小学館の鳥の図鑑であった。定価は三百三十円と印刷されている。ページを開いてみると、プーンと印刷の匂いが鼻をつき、美しい野鳥がそれぞれのページに、色彩豊かに描かれていた。野鳥では学校じゅうで誰にも負けない学だったが、図鑑にはその



彼の知らない鳥がいっぱいあった。

（この図鑑がオレのものになる……）

学はそう思っただけで、図鑑に描かれている野鳥が、すべて自分のものになるようなよろこびを感じるのだった。

行きは緊張づくめだったが、図鑑を買った帰り道は、体が浮くような足どりで、バス停で一時間待たされていても、夢中でページをくっていた。時のたつのも忘れていた。

うれしくて、うれしくて、誰彼になく図鑑を見せて、よろこびを分かちあいたい気持をおさえることができなかった。

子どものころ遊びまわった川（天竜川）は、学にさまざまなことを教えてくれた

5●自然に学ぶ日々



野鳥図鑑を購入したことから、学の野鳥飼育熱にはいっそう拍車がかかった。つぎつぎと鳥をとらえてきては飼うので、軒先にはいつも何種類もの野鳥たちが、一日じゅうさえずっているようになった。飼育箱も自分で作り、餌の確保も自分でやった。

学校の勉強はさっぱりやらず、野鳥の飼育ばかりにかまけている学だったが、厳しいはずの父親は、なぜか末っ子のやることには文句をいわなかった。ただ、フクロウとかワシ、タカなど、大型の猛禽類は生きた餌をあたえつづけなければならず、子どもの手で餌の確保はとても無理だといって、飼うことは許さなかった。

学は、父の言葉に表むきは素直にしたがっていたが、心のなかではいずれの日にか、ワシとかタカを飼ってみたいと思っていた。図鑑で見る猛禽類のあの鋭い射るような眼と、肉を引き裂く鋭いくちばし、強じんな爪、四囲を圧倒する威厳にみちた姿は、ほれぼれするほど魅力があった。

しかし、小学生では飼うことはもちろん、大型の猛禽類をどのようにしてつかまえるのか、その術を知らなかった。学がそれまでに飼っている野鳥は、すべて自分でつかまえてきたものばかりだった。そのほとんどは、馬の尻尾の毛で輪をつくり、この輪のなかへ小鳥たちの足を入れさせるという方法でつかまえてきたのである。

そのため、馬の尻尾の毛が必要だった。彼はその毛ほしさの一心で、馬を飼っている近所の農家のおいさまに、子ども心にもお追従をいったり、あるときには農家の昼休みどきに馬小屋へ行き、馬の後ろから一、二本の毛を失敬したこともあった。丈夫な毛を引き抜くのだから、馬を怒らせて蹴とばされるおそれもあった。だが、機敏な彼は、ませ棒の間から垂れ下がった毛をつかむと、一瞬の間に引き抜き、馬が「グフフン」と目を白くしてふり返ったときには、脱兎のように小屋から逃げ出していた。

野鳥をつかまえる方法には、まだほかに何種類かあった。しかし、町で売っているよ

うな道具は買ってもらえるはずはなく、すべて学自身が作るしかなかった。

羽根や毛を痛めるが、確実につかまえる法にトリモチを使う手もあった。駄菓子屋に冬場になると売っていたが、学はモチの木の皮から時間をかけて、ネバネバした強力なトリモチをつくりあげたものだったし、〝落としカゴ〟も、竹を切り、一本一本ヒゴを作ってカゴを組み立てて作りあげた。

このほかに、おとりをつかって仲間をよび寄せる法とか、自然の木や竹に細工をしてつかまえる方法があり、父親がそれとなく教えてもくれた。

道具はととのっても、仕かける場所、時期、時間などによって、とれたりとれないことがあった。学は、とれないときには、この前は簡単にとれたのに、なぜだめなのかを、小鳥の習性、鳴き声など、知るかぎりの知識をあつめて研究してみた。失敗も数かぎりなくあった。

どうしてもうまくいかずに、半べそをかいていると、父親がズバリとアドバイスをしてくれた。なんでもない言葉のようだったが、そのとおりにすると、見事に獲物がかかってきた。

「おとうちゃってすごいなあ」

忙しく働く一方で、子どもとの団らんの時のない父子だったが、こんな一瞬に父親のえらさをしめしてみせるのだった。

父親らしさといえば、自然のなかに連れ歩いて、伊那谷に生きる男の生きざまをよくしめしてくれたものだった。

家から十五分も歩くと、天竜川へ降りていけたが、夏休みになると、兄たちと一緒に夜釣りに連れていってくれた。ウナギやコイ、アユなどをねらった釣りであった。

父は、子ども三人に懐中電燈を持たせて岸辺に待たせると、

「いま、おとうちゃが、眠っているサカナをつかまえてやるからな」

といって、川岸に近い大きな石の下にそっと腕をさし入れ、ゴソゴソやって、そのうちに、ピチピチと水しぶきをあげるガゴタや天竜カジカを、ひょいとつかんで岸辺へ投げてくれた。ガゴタとは、ハヤの雄の伊那谷でのよび名であった。エラのまわりに、ギザギザした飾りをつけ、胴のあたりは空色や朱色の派手な模様をつけた子どもたちのあこがれの魚だった。しかし食べると骨っぽくてまずかった。子どもたちは、素手でつぎつぎと、すばしっこいサカナをつかまえる父親のかがんだ背のあたりに、深い感動の眼をそそいで、

「サカナも眠るんだなァ、おとうちゃ」
と、新しい発見におどろきの声をあげていた。

父の祥夫が、学をもっとも感動させたのは、小学校五年生のとき、彼(かれ)を一人連れて天竜川へ行き、川岸の浅瀬(あさせ)で寝(ね)ている魚を見せたことだった。

懐中電燈に照らし出された魚は、動きがにぶく、人の気配にけだるそうに、モソーッと逃げていくのだった。学にとってこれは生きた教材といえた。

夏になると、捨て針(ばり)といって、夕方、川へ餌をつけた釣針を仕掛(しか)けておき、早朝あげにいって、アユやヤマメ、タナゴ、ときにはアカザという赤いナマズやウナギを釣りあげて、学たちに見せてくれた。子どもたちは、キラキラと肌(はだ)を光らせて、ピチピチはねる魚を見て、大声をあげ、

「父ちゃん！　やったァ！」

と、感動の眼(まな)ざしで見つめていた。

父親は、釣針も、ウナギを裂く小刀も、すべて手づくりだった。

父親はまた、ロープの使い方や、トビ職人が使うシノという道具で針金のしばり方なども教えてくれた。この教えは、動物カメラマンとなった学が、ワシの写真をとるため

に、断崖絶壁に、ロープで体をしばりつけて何日もすごすとき、どれだけの助けになったことか。

学の幼児体験のなかで、父親とともに忘れがたいのは、小学校二〜三年生の担任だった二十代前半のO先生だった。

この先生はスポーツマンで、その若さからくるひたむきな純粋さと厳しさで、スパルタ教育に一貫していた。集団生活を乱すような生徒は、遠慮会釈なくしごき、往復ビンタや足げりなどは日常のことだった。

それだけに、学という名前とは正反対の、クラスいちばんの悪ガキで、勉強は不熱心でいたずらばかりしている少年にたいして、徹底的に鉄拳制裁を加えた。一メートルの竹の物差しやホウキの柄で腰をたたかれたり、掃除をやらずにサボっていて、雑巾やバケツでしこたまなぐられたこともあった。

「学！　お前はまたサボっているな」

若い先生は、顔を真っ赤にして、どなりあげるのだったが、少年は反抗的な態度で薄ら笑いを浮かべて、素直に命令にしたがおうとはしない。

「お前というやつは、親からマナブなんていい名前をつけてもらいながら、ちょっとも

先生の教えにしたがったり、学んだりしないじゃないか！」

学はそうののしられて、「おれのしったことか」とそっぽむいた気持になるのだった。そのふてくされた態度が、さらに若い先生の怒りに油をそそいで、ゲンコツの雨が降りそそぐというパターンだった。

学少年は、自分のいたずらからなぐられ、痛い思いをするたびに、

「おとうちゃとおかあちゃが、おれに学なんて名前をつけたばっかりに、よぶんになぐられなくちゃならんのだ……」

と、自らの行為は棚にあげて、親をうらんだものだった。そして、名前に関する親へのうらみは、学年がすすむにつれて、強まっていった。

しかしこの先生は、勉強ぎらいで反抗的だった学にとって、きびしく恐い存在だったが、とても自然が好きな人で、天気のよい日には、野外授業によく連れだしてくれた。

6●野鳥の言葉を聞きながら…



伊那谷の小学校は、都会にくらべて教材は乏しかった。

だが、野外に目をむけると、すばらしい生きた教材がころがっていた。

その先生は、夏になれば近くの小川へ水生昆虫や魚をつかまえに、生徒を引率していった。

川にはゲンゴローという大きなハサミをもったグロテスクな水生昆虫や、ホタルの幼虫の餌となる巻貝のカワニナ、ツボとこの地方でよぶタニシなどが、川底にひっそりすんでいた。

雑木林へ行くと、カブト虫やクワガタ虫がクリやクヌギの幹の穴のまわりにひそんで

いた。
伊那谷の子どもたちにとって、カブト虫の角の大きい種類をとることは自慢の種であった。虫の呼び名は、鍬形によって歴史上の武将の名がつけられ、「義経」とか「太閤」、「梶原」といっていた。
「梶原」とよぶカブト虫は、頭の上に四角いコブのようなふくらみをもち、見事な角が格好よく突き出していて、子どもたちのいちばんのあこがれの的だった。
学は、雑木林に集まるこれらのカブト虫を発見することにも、すぐれた才覚をもっていた。早朝、露をふんで行くとよくとれたし、カブト虫には、人の気配がすると、ポッンと落ちて死んだそぶりをする習性があった。その裏をかいてやれば、とらえることも容易だったのである。
先生はまた、秋になると、クリやドングリ、アケビの実をとりに山へでかける時間を多くつくってくれた。クリの実は、小粒の山グリの一種だった。それは、落葉の上のあちこちに茶褐色の肌を光らせて落ちていた。目ざとい学は、誰よりも多くのクリを拾っていた。
クリ拾いも一息ついて、ふりあおぐと、うっそうと蔓をからませたアケビが、紫色の

実を開いて、ゼリー状の果肉のなかに、小粒な種をつつんで、群がり下がっていた。アケビの透明な果肉は、口にふくむと甘さがいっぱいにひろがって溶けた。小粒の種はじゃまだったが、果肉をたんのうした後で、プッと吹き出せばよかった。

雑キノコであったが、アミタケやシバカブリ、ハツタケ、オショウニンなどもよくとれた。傘が毒々しいほどに色どられたものは毒キノコだといわれ、また、茎の真っ二つに裂けるものが食べられると教えられていた。

野外授業でとってきたものは、生きものであれば教室で飼育し、植物や木の実は発芽実験に使い、生徒たちにそのしくみを教えてくれた。

教室では、町から買ってきたジュウシマツやカナリヤもたくさん飼っていた。鳥類には目のない学にとって、教室で飼う小鳥は、授業以上の興味の対象だった。

小鳥は、当番を決めて飼育していた。当番に当たったものは、家からアワやヒエなどの餌を持ってくるほか、その日は水をかえたり、排泄物の掃除をすることになっていた。生徒によっては、めんどうくさがって、いやいややっている者がいた。学はそんな生徒をみると、

「おれがかわってやらァか」

と、すすんで他人の当番までかって出て、うれしそうに、飼育箱の掃除から餌の手配までをやったものだった。

学校でも家へ帰っても、こんなことばかりやっていたので、勉強はますますおろそかになり、成績はビリから数えたほうが早かった。教師はあいかわらず〝学〟の名前にそむいた生活ぶりを指摘して、もっと勉強をするように忠告もしたし、団体生活になじまない突出した行動をとる彼を、ときになぐり叱責した。

だが学は、先生がいきりたてばたつほどかたくなに抵抗し、そっぽをむいた態度にでて、ますますひねくれた子どもになっていった。

しかし、勉強はおろそかだったが、生きものにたいする学の知識はたいへんなものだった。六年生になるまでに、伊那谷にすむ野鳥の種類はすべて知っていたし、鳴き声を聞いただけで、

「あ、あのキョローキョと鳴く鳥はトラツグミだな」

「あそこにチチー、ジョイジョイとさえずっている黒茶色の小鳥はコルリだよ」

と、いい当てることができた。

そればかりか、季節によって鳴き声が変わったり、羽根の色が変わる……あるいはオス

鳥の動作で、威嚇しているのか、求愛しているのかなど、生きものの読み方がわかるようになっていた。

大自然のなかで、のびのびと飛びまわる野鳥を観察する一方で、とらえた野鳥を飼育箱に入れて、家で餌うことはつづいていて、子リスを飼うころまでには十四種類もの野鳥が、軒先でさえずるまでになっていた。

——しかし、リスがヘビにのまれた一件をきっかけに、飼育していた野鳥たちをすべて野に解放してしまい、小鳥たちのかごも全部焼却してしまった。

飼育こそやめたが、学の野鳥や動物好きには、いささかの変化もなかった。あいかわらず、裏山へ行っては、いろんな小鳥たちの巣を見つけ、木によじのぼって巣のなかをのぞき、ヒナが黄色のクチバシをパックリあけて、「チーチー」と餌をねだるのを眺めたり、卵を発見すると、いつごろ孵化するだろうかと、その日を指折りかぞえて楽しみにしていた。

学は、野鳥の鳴き声や、ちょっとした動作で、近くに巣があるな……とか、巣立ったばかりのヒナがひそんでいるなと、的確に読みとれるようになっていた。

中学校へすすんでも、学の探鳥趣味はつづいた。南アルプスの稜線につながる端山と、

天竜川によって形づくられた段丘を下って向い側にまたがる中川村は、小学校が四つの分校に分かれていた。学は本校に通った組だが、中学校になると、これらの分校の生徒がすべて一校に集まるしくみになっていた。

遠い地区から来る生徒は、八キロも十キロもの岨道を通って来るのだった。ところが、南アルプスの麓に近い山奥の分校からやってくる生徒のなかに、学と同じくらい野鳥好きな少年がひとりいた。



好みを同じくするもののカンで、二人はすぐ親しく口をきく間柄になっていた。

「おらほうの裏山には、タカが来るんだ」

「タカが！　トンビじゃないのか」

学は、まだ、タカを近くで観察したことがなかった。野鳥に関しては、本校一の物知りと自他ともに認めていた手前、自分より野鳥観察の豊かな少年の登場には、うらやましさとやきもちのいりまじった気持を抱いた。



山の子どもたちは、氷がはると元気いっぱいゲタスケートを楽しむ（左から二人目が学少年）

「タカが見られるのか……いいなァ」

「うん、タカばっかじゃないに。全身が朱いアカショウビンだって見られるんだぞ」

アカショウビンは、図鑑でのみ知るめずらしい小鳥だった。雌雄ともに同じ朱色で、大きなクチバシに特徴があった。深山幽谷の渓流や湖のほとりにすんでいて、魚やカエル、昆虫などを捕食しているが、餌をみつけると急降下して、一瞬の間にとらえる機敏な野鳥だった。

分校から来た少年は、このアカショウビンを見ているというのだ……。

「いいなァ……おれも見てみたいよ」

学は、ぜひ、彼の家のある山奥へ探鳥に行ってみたいと思った。

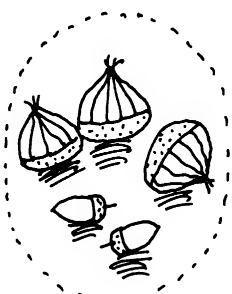
少年は快く、「よかったらおいなんよ」と訪問を承知してくれた。

学はさっそく、つぎの日曜日に、自転車で二時間半もかかる山道を、まだ見ぬ鳥見た

さの一心でたずねていった。上り下りの多い、けわしい山道をひとりで行くのは、なみたいていのことではなかった。

学の山奥への探鳥はつづいたが、その少年は、中学校に半年ほどいただけで、よそへ転校して行った。東京オリンピックを前に、山村からの都会地への人口流出時代に入っていて、彼の一家も、野ウサギやカモシカのおとずれる山の生活に見切りをつけて、いずれかの地へ去っていったもののようだった。

せっかくの友もいなくなって、鳥好きは中学校で学ひとりになってしまった。



7●中学〝落ちこぼれ〟時代



中学生となっても、あいかわらず勉強はさえなかったが、学の行動範囲はひろがっていった。そのころすでに、伊那谷に生息している野鳥のすべてを見つくしたような感じになっていた。

時おり、近所の友だちを誘い、飯田の小鳥屋まで、めずらしい鳥を見に出かけることもあった。

飯田市は、南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の、いちばん南端にある市だった。

古くからひらけ、小京都とよばれた小高い丘のハイカラな町で、伊那谷に住む人々に

は、飯田へ行くことが、ちょっとした都会へ出るような張りつめた気持を抱かせたものだった。

学たちは、その町へ自転車で出かけていった。竜東とよぶ天竜川の東ぞいの道を、松川町、豊丘村、喬木村と横ぎり、弁天橋を渡って松尾村、鼎村をへて、ようやくたどりつく、往復で五十キロ近い道のりだった。

目ざす小鳥店は、ゆるやかな坂をのぼっていった谷川線のなかごろにあった。飯田の小鳥店だけに、鳥かごのなかには南方から来た九官鳥やオウム、極彩色のはじめてお目にかかる小鳥や、眼が鋭く、くちばしが鉄の爪のようにグイと曲がったハヤブサ、ノスリ、フクロウなどがいた。

学がはじめに実物にお目にかかる種類の鳥も少なくなかったが、小学生時代から野鳥図鑑の上で豊富な知識のある彼は、友だちに、ひととおりの生態を話して聞かせられる〝鳥博士〟であった。

はじめのころは、買いもせずに、長時間、鳥かごの前に釘づけになっている彼らに、店のものは迷惑顔だったが、上伊那郡の中川村から自転車でやって来た中学生たちと知ると、

「えらい遠いところから来たんだなむ」

と、好意的になった。

学は、たったひとりでも、飯田の小鳥店へ出かけることもあった。片道三時間以上もかけた道のりだったが、めずらしい鳥を見たい一心で、少しも苦にはならなかった。

しかし、探鳥や、小鳥店の鳥を見るだけでは、なんとなく空しいような気持がしだいにつのっていった。野鳥を飼うのは、きっぱりやめていたものの、やはり身近なところに鳥がいてほしいと思うようになった。

「そうだ！　伝書バトだったらいいら」

伝書バトは、血統のいいものだと、遠く北海道、青森といった地から、自分の巣を忘れることなく、確実に帰ってくる鳥だった。くちばしの根元の鼻が、白いカサブタのように大きい、目のまわりが白くくまどられた灰黒色や、薄い茶褐色のものが多く、首の部分はルリ色に光って格好がよかった。

彼は、中学一年から三年までの間に、常時三十羽から四十羽ぐらいを飼い、ハトのためなら、どこへでも出かけるようになっていた。ハトを通して、隣りの村や町、県外にまで同好の友ができ、情報を交換するまでになった。彼らは、よりスピードが出る優秀

な伝書バトを手に入れるために血まなこになっていて、血統のいいハトをえるために、手紙を出しあっていた。

学は、このころ、ハトが最優先の生活で、書きなれない手紙を、県外の〝鳩キチ〟に書いて送ったりした。共通の趣味をもった仲間意識で、返事はかならずとどいた。ものすごいうまい字と、立派な文章の、学と比較にならない教養のある人や、年配の人が多かった。が、彼らは、子どもでも差別はせず、平等にあつかってくれた。

「やっぱし、鳥好きの人はちがうなァ」

学は、達筆な手紙を受取ると、胸をときめかして読みながら、自分をひとかどの人間にあつかってくれたよろこびにひたるのだった。

学校ではみたされぬものが、その文通によっておぎなわれているようだった。

学校といえば、彼は完全に浮きあがった存在になっていた。成績は後ろからかぞえたほうが早いくせに、ガキ大将然としてふるまっていたからだった。みんなが高校をめざして、顔色をかえて受験勉強をしているというのに、「なんだい、高校なんか」と、タカをくくっていた。

クラスに、学と同じような手におえない〝悪童〟が三人いて、徒党を組んでのし歩い

たため、彼らは先生とクラスメートの目の敵とされ、ことあるごとに怒られてなぐられたり、廊下に立たされたりした。

ほかのクラスの生徒が行き来する廊下に立たされることは、いかにも面白くないことだった。学は、プイッとそのまま外へ出ていって、学校の近くに見つけてあった鳥の巣をのぞきに行き、なにくわぬ顔でもどってくるのだった。無断外出は当然、先生の新たな怒りをかった。

「学！　お前はいままで、どこへ行っていたッ！」

「………」

彼は薄ら笑いを浮かべて、上目づかいで先生の顔を見たが、無言だった。

「どこへ行っていたんだッ！　いえないのか」

先生の顔は、こみあげてくる怒りにひきつり、頬のあたりがブルブルふるえている。こうなると、つぎに、パンチがとんでくることは必至だった。

案のじょう、右手が学の頬をめがけてとぶ。機敏な少年だけに、その手はちょっと頭をかがめるだけで簡単によけられたし、もう一メートル六十センチ近くになっている学が、一発、無防備の先生のアゴあたりを見舞えば、ノック・ダウンも可能だった。

（やってやろうか……）
心のなかで、ひょいとそんな誘惑が頭をもたげた。
（まてまて。それをやっちゃおしまいだ）
彼は、一瞬の誘惑を懸命にこらえた。
そんな空想をしている間に、頬にピシャッと乾いた平手打ちの音がひびき、ヒリヒリした痛みが顔半分を占めた。
中学三年間を通じて担任を通した先生は、最後のころになると、学や、その同調組の二人をなんとなく避けるようになり、見はなされた格好になった。クラスメートからものけ者あつかいで、三人の〝悪童たち〟を見て見ぬふりをしはじめた。
面白くない三人は、ますます突っぱった態度になった。せせこましい規則にしばられた学校生活が息苦しく、一刻も早く社会へ出たいという気持が強まっていった。
しかし、その気持の一方で、農業高校の畜産科あたりだったら、動物好きの自分の性に合っていると、進学してみたい気持もあった。四十年近いころで、伊那谷でも高校へ進学するものは、九十パーセントを越える時代に入っていた。
進学しないものは、だから、よほどの落ちこぼれか、家の貧しいもののどちらかと、

変な目で見られる雰囲気となっていたのだ。

学も三学期に入ると、どこかの高校を受験しようと、一応、先生にその旨をつたえた。

「……いまさらお前……。どうせダメだからやめておけ」

教師は、学の唐突な進学希望を、ハナから受けつけようとしなかった。

中学時代の三年間を、ツッパっていた学と他の二人は、願書を提出の時期になっても、なんの音沙汰もなく、完全に無視されたままだった。

「先生、ぼく、農業高校の畜産科のあるところを受けてみたいんだけど……」

しびれをきらして、学が高校受験の希望のあることをつたえたときには、通学可能の公立高校の願書は、すべて締め切られた後であった。

「学、ざんねんだけどな、もう公立は締め切ったんだよ」

「えっ！　どうしてぼくたちには、提出日を教えてくれなかったんですか」

カッとして、血の気のひいた顔で、問いつめるようにそういうと、

「いまさら行こうといっても、公立は無理なんだ。どうしても行きたかったら、私立へ行くしかないなァ」

学はそこまで聞くと、自ら席を立った。その私立は、当時金さえつめば誰でも入学で

きる、落ちこぼれ救済校だった。ただし、私立だけに、受験料と授業料は公立の何倍も高かった。あいかわらずの貧乏生活をつづける宮崎家だった。勉強もせずして、この期になっていい出せるはずはなかった。

「そうか！　おれたちはどこの高校へも行かしてもらえないのか……もう、この社会ではフルイにかけられたダメ人間というわけか……」

　生まれてこのかた、感じたことのないひどくみじめな、地の底へ沈んでいくような滅入った気持と、「こん畜生！　ただではすまないぞ！」というやり場のない怒りに、心はズタズタにひき裂かれた思いであった。

　彼はその夜、布団を頭までかぶって、体をふるわせて泣きながら、この先、いったいどうしたらいいのか、深い挫折感にのたうっていた。

8●カメラとの出会い



進学ののぞみは断たれて、浪人して翌年の受験をめざすほどの余裕は、宮崎家にはなかった。学は、好むと好まざるとにかかわらず就職せざるをえない。

卒業式を間近にひかえて、バタバタと決めた就職先は、地元のバス会社だった。車掌見習いで、会社の寮に生活しながら仕事をおぼえていくことになった。安い賃金で雇える中卒者を入れたバス会社の待遇は、決していいものではなかった。

心のすすまぬ仕事に、ふてくされた態度でついていて面白いはずはない。三ヵ月後には不平不満が爆発して、あっさりやめてしまい、しばらくは、昼間は天竜川で魚釣り、

夜は中学時代の落ちこぼれ組と、さそいあわせて遊び歩いていた。

遊びながらも、かつての同級生が、高校のマークも新しい帽子をかぶり、歩いているのを見ると、恥ずかしさと口惜しさで、こそこそともの陰へかくれてしまいたい気持だった。

しかし、いつまでも遊んでいるわけにはいかない。落ちこぼれの他の二人は、板金工と左官の仕事を、昼は真面目につとめているのだ。

本家の伯父に説教され、気がすすまぬままに、伊那の職安へ出向いて行った。そこで紹介されたのが、信光精機株式会社だった。

「高級カメラの部品工場でなァ、カメラの交換レンズの組み立てをやったり、精密部品を作るところだに」

職安の人はそう説明してくれた。

カメラと聞いて、学はちょっと心が動いた。自分には高嶺の花のような縁のない代物に思えたが、あのメカニックな構造とか、黒い重々しいボディの質量感は、なぜかひきつけるものがあった。しかし、人の持っているものを遠くで見ただけで、自ら持ったことはなかった。

入社してみると、信光精機は従業員が五十人ほどの小さな会社だった。組織は小規模だったが、そこには高級の一眼レフカメラの交換レンズのさまざまなサイズのものが、ベルトコンベアーに乗って流れていた。短いがすごく大きい広角のものや、三十センチも五十センチもある望遠レンズもあった。

そのころ、伊那谷で高級カメラを持ち歩く人は少なかった。諏訪で作っているヤシカの大衆的な二眼レフカメラを、誇らしげに肩にかけて歩く若者を、ちょいちょい見かける程度だった。

もちろん、学の家にカメラはなかった。手にさわったことすらなかった。それが、信光精機に入社するや、宝石に匹敵する値打ちの高級カメラが、ベルトコンベアーに乗って流れているのだ。

そして、重厚な黒い鏡筒の先には、磨きあげられたレンズが、神秘的な透明度をたたえて、おさまっている。

「このレンズの輝きはどこかで見たものだ……」

学は、レンズに対面したとき、一瞬それが、子どものころから親しんできたあの野鳥たちの目の輝きにそっくりであることに気づいたのだった。

「そうだ！　あの鳥の目の輝きだ。おれの大好きなタカやワシの目の輝きだ……」
学は入社したその日に、すっかりカメラのレンズに魅せられ、すぐに自分も一台買ってやろうと心のなかで思った。しかし、給料一万円くらいの少年工には、とても手のとどかぬ品であることがわかった。三、四万円はする高級品だったのである。
会社でも、カメラを持っている人は社長だけであった。中卒の新米の工員が、入社早早に買える雰囲気ではない。
「なんとしてもカメラを持ちたい」
学は日増しに強くなってくる、はやる気持をおさえるために、社長が毎月読んでいる数種のカメラ雑誌を借り出して、読ましてもらうことにした。カメラの知識のまったくなかった彼に、それらの雑誌は新鮮な刺激をあたえてくれた。カメラに一眼と二眼があり、シャッターに「フォーカルプレーン・シャッター」と「レンズ・シャッター」「ビハインドレンズ・シャッター」などがあること、メーカーがいくつもあって、機種にも微妙なちがいがあることなども、はじめて知ったことだった。
雑誌でわからないことは、社長に直接問いただしたが、社長は新入り工員の初歩的な疑問に、快く答えてくれた。おいおい知ったところだが、社長は戦後すぐ、ある有名カ

メラメーカーの設計室にいた人で、メカニックに関しては、すごい権威者とのことだった。
しかも、独立した自らの会社で、社長の設計によるカメラの、自社製品も出していた。
その当時、カタログやカメラ雑誌で、もっとも高い評価をえていたのが、日本光学で出しているニコンFだった。ライバル製品が三、四万円台なのに、六万七千円もする図抜けた値段で、その高さからみても、製品のよさ、人気の高さがわかろうというものだった。
学は、そのニコンFを月賦で購入することに決め、地元のカメラ店へ注文してみた。車の運転免許もとらない男が、いきなりイタリア製の最高級スポーツカーを注文したようなもので、カメラ店のおやじさんは半ばあきれ顔をして、
「お前さん、カメラは初めてかな……」
と聞き、ニコンFが世界でどのような位置にあるブランドであるか、初心者にはいかにぜいたくなカメラであるかについて一通りの説明をしたうえで、半年待たないととても入手は無理だから、手ごろなミノルタのニューSR―7でどうかとすすめてくれた。
「で、そのミノルタとかいうのは、いくらするんな」

学は出鼻をくじかれた気持で、ふてくされた聞き方をした。

「三万五千円だに」

学の給料から計算して、三ヵ月半飲まず食わずで、やっと手に入る計算である。学は、次善策として、その品を買うことにし、会社から給料日払いで十ヵ月にわたる月賦を組んでもらい、ようやく目的を達成することができた。

ニコンFは買えなかったが、ミノルタ・ニューSR－7が、その後の生涯をかけるカメラとの初の出会いとなった。しかし、このメカニックな鳥のような眼をもった物体が、学の人生の可能性を大きくひらいてくれる幸運の女神であろうなどとは、そのときは考えてもみなかった。

ただ、黒い質量感のあるシンプルなデザインの機械を抱えていると、なぜか心がうきうきとわきたってくる気持がして、ひとりでに笑いがもれてきた。

学は、勤めから帰ると、貴重品をあつかうような手つきでカメラを手にとり、ファインダーをのぞき、焦点距離を動かしながら、被写体を追ってみる。レンズを通してのぞく外景は、限られたせまい視界であったが、そこにはまったく新しい世界が、見えてくる感じがした。

日曜日になると、待ちかねたように山へ入って、一日じゅう動物を追いかけ、その生態をとることにした。通常、カメラの初心者だったら、家族や友人のスナップ写真をとって、えつに入っているものだが、学はこの点、ちがっていた。

ただし、動物写真をとるといっても、給料は安くフィルムは高いので、シャッター一回が百円につくと考え、一回一回押すのは慎重だった。慎重がすぎて、鋭い動物のカンで、レンズにねらわれているのを感知され、絶好のシャッター・チャンスを逃すことも、たびたびだった。

学の自由になる金と時間が、すべてがカメラにそそがれる生活に変わったのは、このときからである。彼は、中学校の同級生が高校へ通い、休日ともなると単車をぶっとばしたり、優雅な遊びですごしているとき、一台のカメラを後生大事に肩にかけて、山から山へとけものを追いつづけた。

せまい地域のことであるから、高校へ進学した同級生に、山道で会うことも少なくなかった。彼らは、中卒だけでカメラ工場に就職した学を、あきらかに見下げた態度で、強いて無視し、話題のはしにのぼるときには、

「あのバカが、キツネだタヌキだといって山をほっつき歩いていやがって！」

と、はきすてるようにののしるのだった。

高校へ行けなかっただけで、ものすごい劣等感の固まりになっている身に、その言葉は傷口に塩をすりこまれたような痛みとなって、心を切りきざんだ。ふるえのくるような口惜しさが、こみあげてくるのを意識した。

「畜生!」

十七歳の世間知らずの少年が、そのいやし難い言葉を背に受けたとき、ものいわぬカメラにますます没入する以外に、当面の救いはなかった。

学は以前にもまして、カメラ雑誌を読みあさり、撮影の方法を身につけようと必死になった。標準レンズだけしか持たない身で、とれる範囲は限られたものでしかなかった。が、彼はあらゆるものにレンズをむけ、撮影技術を身につけようとこころみた。

中古の引伸機も手に入れ、現像からプリントまでできるようになると、つぎの段階として交換レンズがどうしてもほしくなった。野生動物を追う以上、望遠レンズは絶対に必要な備品であった。

幸運にも、カメラ店のおやじさんが、百ミリと二百ミリの望遠レンズを、必要なときに学に貸してくれることを約束してくれた。この店主は、学のひたむきなカメラ熱にほ

だされ、商品である望遠レンズを、貸与する気持になったようだった。
望遠レンズを使いこなせば、動物写真に確実な収穫が約束されることになる。接近困難な山の向こうのけものや、高い木の上の鳥も、ピッタリ焦点にとらえられるし、目的物だけがクローズアップ可能となるのだ。
鬼に鉄棒とはいかないが、棒くらいは持てた心境だった。



9●初めての入選



このころ、学は夜空を滑空するムササビをとって「アサヒカメラ」月例コンテスト五位に入選するよろこびを味わった。

ムササビは、リス科のネコくらいの大きな野生動物だった。前後のあしの間に皮膜があり、これを広げて高い木の上を滑空する夜行性の動物で、古い神社や仏閣、深い山中にすんでいた。その生態から見て、不気味さがあった。

学の生まれた中川村の山中にもいて、樹上に小枝や木の皮などで、丸いサッカーボールのような巣を作っていた。子どものころからなじみの動物だったから、巣を見つける

ことは簡単だったが、夜でなければ活動しない動物だけに、勤めから帰った夜間に、ねらった山へ出かけていった。

望遠レンズを、カメラ店主の好意で貸してもらえるようになったばかりで、高価なストロボなどは、とても買えないので、フラッシュバルブを使って撮影することにした。まず、両手を自由に使えるようにと、懐中電灯を頭にくくりつけ、その光のなかでとらえた、滑空するムササビの、一瞬にピントをあわせてシャッターを切るというものだった。

暗闇のなかの撮影に加えて、このときにはカラースライドを使うことにしたので、露出とシャッター速度など、ひどく高度なカメラ技術が必要だった。たったひとり、暗黒の山中に入って、ムササビの現われる一瞬を、長時間ねばっているのは、伊達や酔狂でできることではない。

「あのバカが、カメラを持って山のなかをほっつき歩いている……」

という同級生たちののしりの手前、なんとしても、一人前の写真をとってハナをあかしてやりたいという気持と、高度なカメラ技術に挑戦し、せまい歩幅ながら一歩一歩前進しているたしかな手ごたえに、なんともいえぬ楽しみをみい出しはじめてもいたので

ある。
そのころ、カメラ熱がこうじて、駒ヶ根市のあるカメラクラブにも入会し、月に一度の例会に、写真のことを知りたい一心で、作品を持って出席していた。クラブの主流をなしていたのは、モノクロプリントの人物や風景写真だったが、学は動物のみをねらい、プロジェクターを使ってカラースライドを発表するなど、異色の少年カメラマンとして、注目をあびはじめていた。
こと動物写真に関しては、クラブでの先達はいなかった。その道の学の手本となったのは、動物写真家の田中光常が「アサヒカメラ」に連載している「日本野生動物記」だった。
知床へヒグマを追ったり、釧路湿原でタンチョウヅルをとる。あるいは日本アルプスの雪渓でライチョウの親子、絶壁に塑像のようにたたずむカモシカをねらう。日本じゅうの野生動物を追いもとめて、田中は見事な彼らの生態をフィルムにおさめていた。
田中のその構図のとり方、露出、シャッター速度など、カメラ技法の一つ一つが、学にとっては教科書であり、指導書であった。
「プロってすごいなァ。こういうときは、こんなふうにとるものか……」

学は、毎月の連載を見るたびに、胸をときめかし、楽しみ、教えられ、段ちがいの腕前に感銘をうけるのだった。そして、その教えと感動を、すぐ自らのカメラでためしてみた。彼がその名前に忠実に〝学び〟はじめたのは、このころからだった。

ムササビの写真を、もっとも難関とされた「アサヒカメラ」の「カラースライドの部」へ送ったのも、自分の腕がどの程度のものであるか、ちょっとためしてみようと思ったからだった。

「アサヒカメラ」から、入選したという通知があったのは、半月ほど後であった。

「五位に入った！　このおれの写真が！」

学は、よろこびのあまりに、誰彼となしにふれ歩きたい心境で、一通のはがきを何十回となく読み返した。

はじめて応募した写真であった。カメラをはじめてから、まだ一年もたっていないのに、あの権威ある「アサヒカメラ」の五位に入選したわけである。学は、自分の写真が、次号に掲載されるのを、幼子が正月を待ちこがれるように、指折りかぞえて待ち望んだ。毎日がその期待でバラ色に見えるほどだった。

掲載誌は、入選通知が来てから一ヵ月半ほどしてとどいた。「アサヒカメラ」と印刷

された渋紙色の袋を開くと、毎月読みなれている雑誌がとり出されたが、「ムササビ」の写真は、ハガキ半分大に印刷され、「夜のムササビ　宮崎学（長野）5位」と、撮影のデーターにつづいて、百五十字くらいの選評がそえられてあった。

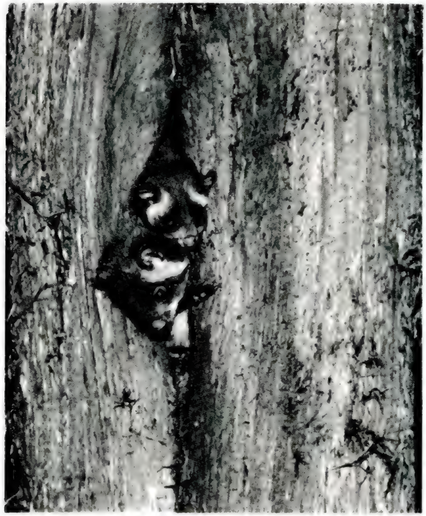
「ムササビの黄色い眼光が小さなヘッドランプのように印象強く、画面をひきしめた。が、しかし、フラッシュバルブ使用によるブレで、焦点ボケをまねく結果となった。このような撮影ではやはりストロボによる高速度露光撮影が先決だ……」

ストロボを買えないからこそ、フラッシュバルブを使用した学だった。審査員による選評は、ありがたく読みくだしながら（ブレで焦点がボケたところに、ムササビの滑空のスピード感が出たのではないか……）と自負する気持もあった。

このページと選評を、学は何回眺めたことだろうか。通勤のさいもしっかりと手にかかえて歩き、寝るときは枕もとにおいて、入選の感激にじっくりとひたったものだった。生まれてこの方、はじめて感じた大きなよろこびだった。たとえ五位であっても、入選したことからくる自信のようなものが、ヒタヒタと胸にみちてくるのを感じた。

「ようし、おれはもっともっと、すばらしい動物写真をとってやるぞ！」

けものを追って、山歩きをする時間は、以前にもましてはげしくなった。ファインダ


ムササビ

ーにとらえた野生動物は、片っぱしから被写体にしていった。伊那谷にすむけものや野鳥のほとんどが、一応は学のシャッターにとらえられたことになる。

しかし、まがりなりにも野生動物の生態写真がとれるようになると、つぎの段階として、誰も手がけたことのない、より難しい対象にせまりたくなってきた。

伊那谷にすんでいる地の利を生かして、その種の被写体にいどむとしたら――学は勝手知った野生動物を頭に描いて、あれこれ考えてみたが、彼自身がまだ見ていないものの一つに、ニホンカモシカがあった。

「そうだ！　ニホンカモシカをねらってやろう」

中央アルプスや南アルプスの山中深くに、たしかに生息していることはわかっている。

だが、よほどの幸運にめぐまれないことには、その片鱗さえうかがえない〝まぼろし〟の動物だった。

学は、地元でカモシカを見たという人を探して、相手の都合もかえりみずにいきなりたずね、カモシカに出会ったときの様子を聞いて歩いた。数少ないそれらの人々は、すべて山登りを趣味としている山岳会員だった。

「そうよなァ……おれが見たのは、中央アルプスの宝剣岳へのぼったときだった」

「おれは、中岳へのぼったときだったかなァ」

記憶をよみがえらせて、ポツリポツリと語る彼らの話に出てくる山々は、いずれも三千メートル近い高山ばかりであった。学は、その話を聞きながら、山岳会へ入って、登山技術を身につけることが先決と考えた。

早速、地元の山岳会へ入会し、テントの張り方とか、張る場所の選び方、キャンプのし方、ザイルの使い方など、登山のイロハから教わっていった。

しかし、パーティーを組んで、いざ登山をする段になると、きびしい規律にしばられ、自由な行動がとれないことを知った。たとえば、登山途中に、カモシカの真新しい足跡や糞を発見したとき、学はすぐにでも、その足跡を追って、写真をとってみたいと思う

……だが、別行動は遭難の危険があり、絶対に許されないのだった。

伊那谷の東西に、屏風のようにそそり立つ高山へ、何回となくのぼってみたものの、山岳会のオキテにしばられて、カモシカにはただの一度も出会うことのない一年半だった。

山登りはうまくなったが、目標とするカモシカに出会えない山行きでは意味がなかった。感触として、カモシカのいそうな手がかりがつかめてきたのをシオに、学は山岳会から脱会することにした。

それからは、土曜日から日曜日にかけて、一人でテントをかつぎ、南アルプス、中央アルプスの山ふところ深く、歩きまわることをくり返した。

だがカモシカは、学の前にはチラッとも姿を見せず、いぜんとして、まぼろしの動物であることにはかわりがなかった。

「いつになったら出会えるのか。ほんとうに伊那谷にいるのかなァ」

勤めを終えて家に帰り、土曜日の夜から日曜日の朝にかけて、夜どおし歩いて三千メートル級の山頂までのぼり、夕方までハイマツのなかにひそんでカモシカを待ちつづける。

結局、からぶりに終わって、また夜を通して下山し、そのまま一睡もしないで工場へ出かけるというハードな強行軍が半年近くもつづいた。

あたり前の人間だったら、とっくの昔にイヤ気がさして、投げ出してしまうところだが、カモシカにあこがれ、なんとしても、このまぼろしの動物をとりたいとの執念にもえる学は、相手に拒否され、苦しめられれば苦しめられるほど、撮影の意欲をかきたてられていくのだった。そのいちずさが、自分ながら不思議なくらいだった。



10●まぼろしのカモシカを追う



学の執念の前に、まぼろしがまぼろしでなくなる日がついにやってきた。

それは、中央アルプスのなかほどの、深い谷間だった。尾根から、その谷間の灌木の森を眺めていると、一瞬、茶色のゴマ粒のようなものが、緑のなかで動いたような気がしたのだった。

「おや、あれはなんずらや」

急いで、双眼鏡でのぞいてみると、そこには、一匹のはじめて見る動物がいたのだった。

「おお、カモシカだ！」

すごい感動が、学の心のなかにみちてきたのはそのときだった。山岳会の一年半、単独山歩きの半年ののちに、ようやくめぐり会ったカモシカだった。

わくわくする気持をおさえて、その姿を追いつづけてみると、野生のニホンカモシカは、シカというよりクマに似た感じだった。倍率のいい双眼鏡でも、その位置からの距離が遠く、全体像をかろうじてつかめる程度で、どんな顔をしているかは、むろんわからない。

しかし、緑の樹海のなかのゴマ粒の発見でも、学にはとび上がるほどのよろこびだった。

「そうか、自然のなかでは、カモシカはこんなふうにしか見えないのだな」

はじめて、カモシカの実体をとらえてみると、いままでにも、カモシカの見えるところまで何度も行っていながら、どう見えるかがわかっていなかったため、見つけられなかったのだと、納得する気持になれた。

いちど、どう見えるかがわかってしまうと、カモシカの発見は容易になった。以来、山へのぼるたびに、双眼鏡でしかと発見できるようになったのである。

学が、カモシカ狂になってしまったのは、それからであった。彼は、まぼろしの動物をしっかりとカメラにおさめ、その生態をひろく世に発表したいと考えたのだった。そのためには、カモシカの行動を徹底的に研究する必要があった。

彼は、しばらくの間、カメラを双眼鏡に持ちかえることにした。カモシカをテーマに、写真をとりたいと念じながら、双眼鏡に持ちかえたところに、学の尋常ならざるすごさがあった。

山へ入って、なにをしはじめたのか――。

朝から晩までカモシカの行動を追いながら、地図の上に時間の経過とその歩きまわった位置を記していったのである。あるときには、五分間ごとにその位置を記して、十数時間におよんだが、その愚直に近い作業のくり返しによって、カモシカの行動が、おぼろげながらつかめるようになっていった。

この手法の発見は、動物カメラマンとなる宮崎学の後半生に、はかり知れない糧となった。ねらう被写体の生態・行動に精通していれば、つぎにどのような仕ぐさ、反応をしめすか事前に読めるわけである。

ひとたび身につけた野生動物撮影のための方式は、タヌキにもワシにも、フクロウに

も使えることであった。
ところが、双眼鏡をカメラに持ちかえて、夢中にカモシカを追いはじめると、勤めは二の次になってきた。伊那谷に大雪でも降ると、休暇願いを出して、雪山へとんでいってしまうようになったのだ。
春先のカモシカ、夏山でのカモシカ、紅葉期のカモシカと、四季を通じての彼らを追っていて、きびしい冬の時期には、標高二千メートル級の山で、どのようにして餌をもとめ、寒さにたえているのか、ぜひともその場面もとっておきたかった。
だが、完全な防寒服を持たない身で、厳冬の高い雪山へ入ることは、学の体にたいへんな消耗を強いることでもあった。ありあわせのセーターや、ジャンバーを重ね着しているとはいえ、零下十数度の身を刺すような寒さは、容赦なく着衣を通して、学の体から体温をもぎとっていった。
「うーっ、寒い」
手先がかじかんで、歯の根も合わず、ピントもままならない。そのあまりの寒さに、
(なにを好んでこんなことをやっているのか)
という、自己否定の考えが、頭をかすめることもあった。だが、その考えはつぎの瞬間

雪の斜面を、真っ黒な固まりがモコモコと横切っていくのを発見すると、すっとんでしまった。体が、興奮のためにほてってきた感じになって、その場にたえていたよろこびにとってかわるのだった。

学のカモシカ追跡は、三年にわたってつづけられた。三度目の冬がすぎ、初夏がおとずれるころ、山歩きをしていて、にわかに疲れやすくなり、日々、根気がなくなってきたことに気づいた。

体だけには自信があり、以前は疲れ知らずだっただけに、この変調は学をひどくあわてさせた。

おかしいと思い、医者に行くと「腎臓と肝臓がひどくやられている。即刻入院しなさい」という診断だった。

「腎臓と肝臓だって!? どうしてこんなことになったんずらなァ」

学はひどい衝撃に、うろたえて、力のない声で間抜けた質問をしたが、医師はぶっきらぼうに、「夜もろくすっぽ寝ないで山歩きをつづけたり、真冬に山で体を冷やしすぎた無理がたたったのだ。身のほど知らぬもほどがあるよ」

といった。

肝臓をやられると、身の置き場もないほどの重い疲労感がおそい、気力も活力のすべてもうばってしまう。

学は、生まれてこのかた、寝つくような病気をしたことはなく、自分はたたいてもこわれない丈夫な体だとばかり思っていたので、いきなり内臓に欠陥があったというだけで、もう人生が終わったような、お先真っ暗な気持におちいってしまった。

当時の医療は、肝臓と腎臓を治すには絶対安静と塩分のない食事療法が主流だった。味気ない食事と寝たままの日々は、気をめいらせるばかりであった。

入院生活は三ヵ月もつづき、いったん退院後は、通院する生活に切りかわった。完治しているわけではなかったから、本来の調子ではなく、ちょっと無理するとふたたび入院、退院のくり返しが一年以上もつづいた。

学は比較的体調のいい日をえらんで、会社へ出てみたが、気力の失せた身ではろくに仕事もできなかった。会社に迷惑をかけるのが心苦しくて、自然、退社へと追いつめられていった。

体は疲れて仕方がなく、勤めもなくした学は、このまま、病気に負けて、わずか二十歳で、この世におさらばをするのではないかと思いまどうようになった。

晴れわたった日に、突如、日食におそわれたような、真っ暗闇の感じに閉ざされた日日であった。

「おれの人生も、これで終わった……か……」

その絶望感に、さらに拍車を加えたのは成人式だった。

クラスメートの大部分は高校を卒業したり、大学へ進み希望にみちた顔をしていた。そして女性は、長袖のきらびやかな和服に身をつつみ、青春のトバロ、二十歳になった日を謳歌しているというのに、学は、二重にも三重にもみじめな立場に追いつめられていたのだった。

(中学しか出ないで、職もなく、内臓欠陥者のおれ……。おれにはもう未来はないのか……)

地の底へめいるような絶望感が、成人式の日の学の心をしめていた。

11●動物カメラマンをこころざす



前途を閉ざされて、どうしようもない絶望感にさいなまれる学の心のなかに、
「どうせ、いちどは死んだようなものだ……思いきって、好きなことをしてやろう」
と、開き直りに似た気持が芽生えてきたのは、ぼつぼつ体調がよくなりかけたころであった。
親がかりの身にはちがいなかったが、健康に回復のきざしが見えると現金なもので、外の空気をいっぱいに吸いこんでみたい気持になるのだった。
学は、体調が少しでもよいと、双眼鏡を持って、近くの山や森へ行き、野鳥の観察を

はじめた。緑したたる山野と、美しい鳴き声でさえずる小鳥の姿は、学の再起をはかる心をなぐさめ、はげましてくれているように感じられた。

学は、伊那谷の自然の美しさと、小鳥のシンフォニーを見聞きしている間に、

「よし！　おれはなんとしても動物カメラマンになって、たったいちどしかない人生を、フルに生かしきってやろう……」

という気概が生まれてきた。

ばく然としてはいたが、この考えには理由があった。ちょうどこのころ、長兄が東京の写真学校を出て、ある新聞社のカメラマンに就職したという朗報が入っていたのだ。

「あにいちゃが、新聞社のカメラマンになったって！」

伊那谷から外へ出たこともなく、学はそれまで、カメラで食っていけるなんて考えたこともなかった。彼の知る範囲で、写真で生活している人といったら、町に写真館を開き、カメラの販売や修理、現像、記念撮影をしているわずかな人々だった。それを、血のつながる兄が東京へ出て、報道写真で生きる道をえらんだというのである。

学の心に、にわかに現実味をおびて、プロとしてのカメラマンの生活がせまって見えたのも無理のないところだった。

しかし、写真学校へも行かず、せまい伊那谷の野生動物を自己流に追いかけている若僧が、はたして生きていけるものだろうかというとまどいも一方にはあった。「できるかできないか」と考えた末に、行き着くのは、

「おれにできることといったら、やっぱり、伊那谷の動物をとる以外にはないずらなァ」

という結論だった。

こと、伊那谷の動物については、誰にも負けない自信があった。現に、カモシカの生態行動は、頭の中に克明にメモされていた。あとは健康を回復して、再挑戦をこころみ、まぼろしのけものをひろく世間に公開してやるだけだ。

彼はカモシカが、偶蹄目（偶数のひずめをもつ動物）に属するウシの仲間であるとか、生きた化石のような珍獣であるとかいった学問的な面にはくわしくなかった。しかし、毎週のように高山へのぼって、自らの目で観察し、行動を追った末につかんだ彼らの日常、餌のとり方、仲間や夫婦、親子の生活については、どんな本にも書かれていない事実にあふれていた。

「見たものが勝ちだ」

本の知識より、観察を積みあげたほうが勝つという人生哲学が、すでに学の頭のなか

に芽生えはじめていた。

動物写真へすすもう……いったんそう決めると、学の心をしめていたあせりの気持は薄らいで、精神的にはかなり楽になっていった。

そのころから体の具合も、薄紙をはぐように、いい状態になっていった。定まった職につくと、それにとらわれて写真がとれなくなるので、臨時雇いや一時しのぎのアルバイトで、活動資金をかせぐことにした。

ダンプカーに乗ったり、ガソリンスタンドの手伝い、バスの車掌、電電公社のケーブル引き、土方……伊那谷でできる仕事は、なんでもこなしながら、他の時間はすべてカメラにつぎこんでいった。

健康をやや回復し、根気がもどりはじめたころ、学のカメラマンへの道を決定づけるうれしいできごとが、たてつづけに起こった。

そのひとつはニホンカモシカの写真でふたたび専門のカメラ雑誌にチャレンジし、幸運にも入選したことだった。写真をはじめて日が浅いとき、「夜のムササビ」で五位に入ったことがあった。ストロボも持たないころで、フラッシュバルブを使っての撮影だったため、右手から左手へ皮膜をいっぱいにひろげて、飛んだところをとることができ

たのはよかったが、ブレがでて焦点のボケをまねく結果となった写真だった。
しかし、そのとき、天にものぼるよろこびにひたったことは、忘れていなかった。
今回の写真は、町のカメラ店の主人の好意で借りた、二百ミリの望遠レンズを用意して、撮影にのぞんだ。
ねらった被写体は、当時、〃まぼろしの〃と形容されているくらい、数も少なく、めったに出会うことのない、野生のニホンカモシカだった。
彼らは、中央アルプスや、南アルプスの二千数百メートルのけわしいガケや岩場、深い森をすみかとしていた。学は、その生活行動をくわしく調べていたから、カモシカの現われる場所は、あらかじめわかっていた。
学は、カメラをすえてものかげに身をひそめ、石になって待機することにした。
彼らは、えさ場を中心に、一定の縄張りをもち、外敵の侵入を許さないために、用心ぶかくみまわる習性があった。学は、その習性を知っていて、無我夢中でとったムササビの作品のときとはちがって、こんどはレンズの絞り、被写体の距離、構図——すべてにわたって、計算しつくして待っていたのだ。
ねらったまぼろしのニホンカモシカが、その焦点のなかにひょいと顔を出したのは、

待機して何時間かたった後であった。学は、一瞬、頭のなかが真空になった気持になり、いそいでシャッターを押していた。

たしかな手応えがあって、まぼろしの野生動物が、はっきりとれた自信があった。

前回の無我夢中でとった作品とちがって、こんどの写真は、レンズの絞り、ストロボのガイドナンバー、被写体の距離、構図――すべてにわたって、計算したうえでできあがった自信作であった。

そして、応募先は前回と同じ「アサヒカメラ」ではあったが、その〈年鑑〉のほうであった。「アサヒカメラ年鑑」は、その年話題の写真を集めて一冊にまとめるもので、選定作品以外に、プロ・アマを問わず、一般応募で三点だけ選抜される慣例になっていた。賞金はつかなかったが、プロ・アマのなかから三人だけという入選者の名誉はたいへんなものだった。

学は、その名誉ある一九六九年版の「アサヒカメラ年鑑」の三人のなかの一人にえらばれたのである。プロになってもやれそうな自信が、この入選によってようやくついた感じだった。

ところが、プロを目ざすとなると、新たな悩みが起こってきた。本格的な野生動物を



カモシカの作品がみとめられ，学は写真の道に

ねらうには、倍率の大きい超望遠レンズが必要だったのである。人間におびえ、用心ぶかい彼らをとるためには、遠くでピントを合わせてシャッターチャンスをねらわないことには、とてもものになる写真はとれるものではなかった。

加えて、その超望遠レンズをあつかうためには、大型のがっしりした三脚も必要だった。また、望遠レンズも一本だけでは用が足りず、何本かの交換レンズをそろえなければならなかったし、一眼レフカメラも一台だけでは役に立たず、サブ・カメラも必要だった。

また、ひろい大自然を背景にとる機会がほとんどだったから、ストロボの光が吸収されてしまわないだけの光量の大きなものもそろえておかなければならなかった。フィルムも消耗品だから、プロともなれば大量に用意しなければならないし、取材に必要な車

のガソリンもバカにならない経費として計上されてきた。
学は、それらの金をつくるために、以前にもまして、アルバイトに精を出した。その一つに、秋から冬にかけて、ドラムカンに灯油やガソリンを乗せて、農家に配達する仕事があったが、月末になると、夜遅くまでかかって、集金のためにお客さまの家をまわらなければならず、肉体的にはかなりきつかった。しかし、一日じゅう外を出歩いている仕事で、精神的には楽だった。
学は、配達や集金の合間に、野生動物の情報を集め、希望したときに休みをもらって撮影をするというサイクルをつくりあげるようにつとめた。
つづく第二の吉報は、このアルバイトに追われる暮れもおしせまった日におとずれた。
突然、関西なまりのある廣岡正勝という人が、カラスのことで話を聞きたいとたずねてきたのである。名刺を見ると、大阪の千趣会という出版社の編集長であった。
「冬になると、この村に伊那谷のカラスがぎょうさん集まるさかい、その大群を絵本にする企画があって、下見に来たんですが……」
折目正しい態度で、来訪の意図を説明した。しかし、大阪の出版社の人が、なぜ、学に白羽の矢をたててきたのか、わからなかった。

「カラスはたしかに集まってきますが、それでなぜぼくのところへ？……」

「ああ、カラスの情報を集めて歩いているうち、誰かこのあたりで動物にくわしい人はいはらへんか、あの道の上の人にお聞きしたんです。そしたら、それなら宮崎さんがええと、すぐ教えてくれはったんです。」

廣岡は緊張気味の顔を笑いにくずして、学をたずねた理由をすじ道たてて説明した。聞けば、たずねた相手は、幼ないころからの腕白友だちだった本家の従兄弟だった。彼は、動物云々と聞くとすぐ、

「動物ならおあつらいむきの男がいますに。近くのガソリンスタンドに、油まみれになって働いているずらで、会うといいら……」

と、伊那弁まるだしの人なつっこさで、学のことを教えてくれたという。

会ってみると、宮崎学は明るい笑顔をたやさない、きわめて好感のもてる青年だった。まだ少年の面影を、目もとや口もとにとどめていたが、こと動物となるとおどろくほど的確な生態観察と情報をもっていて、目を光らせ身をのりだすようにして話をした。

中川村のカラスについては、生まれてこの方、見つづけていることだったから、学の話は詳細にわたり、たいへんに参考になった。

「宮崎さん、よかったら夜、ぼくの宿へ来て話をしてくれませんか」

廣岡正勝は、すでに隣りの町に宿を予約してあったのをキャンセルして、中川村に一軒しかない宿へうつって、学をまねき夜を徹して、伊那谷の生き生きした動物の話に、耳を傾けた。

このとき、学はそれまでにとりだめていた、茶箱いっぱいの動物たちの写真を、おんぼろ車に乗せて運び、プロジェクターにかけて見せたのだった。

写真としては、素人の境を出ない稚拙なショットが多かった。が、構図とか、絞りに難はあっても、野生動物の自然のままに生きる表情を、見事にとらえている作品が多かった。

「これはまたすごい！　ようまあ、まぼろしの動物といわれるカモシカを、ぎょうさんとったなァ。どないしてとらはりました……」

廣岡は、学がひそかにライフワークと定めて、コツコツととりだめていたカモシカの写真に、いたく感動した様子だった。

翌日、学はアルバイトを休んで、カラスの絵本となる舞台を、あちこち案内し、再会を約束して別れた。

12●やってきた幸運の使者



アゴにヒゲをたくわえた、目もとのやさしい人を連れて、廣岡がふたたび伊那谷へやってきたのは、その年の冬であった。

「児童文学者の今江祥智先生です。こんどのカラスの絵本を書いてくださる方です」

きびしい伊那谷の冬にそなえて、防寒服に身をかためた今江は、手すきの紙を横にして、その真ん中に、ただ一行「今江祥智」と明朝書体で印刷した名刺をわたして、

「今江です。よろしゅうたのみます」

と、やわらかい京都なまりで挨拶をした。

今江は東京の、児童書では評価の高い福音館とか理論社で、編集者をしたあと、京都にもどって創作活動をしている高名な作家だった。

学自身は、後になって知ったことだが、今江は才能ある新人を見つけだして、育てあげる名人だった。はからずも、宮崎学もこの名伯楽にみとめられ、念願の動物写真家としての第一歩を踏み出す運命にあったのだが……。

しかし、その後に展開されるドラマチックな動きなど、知るよしもなかった。

今江との運命的な出会いをつづった学の一文「今江先生と私」には、そのくだりをつぎのようにのべている。

その頃、私は村に一つしかないガソリンスタンドでアルバイトをしながら近所の山へでかけ、いろんな野生動物を写し続けてはいつか誰かに認められる日を待っていた時でした。そんな時、私を認めて下さった最初の一人が今江先生だったのです。

(中略)

当時の私は、動物の生態カメラマンをめざしていたといっても、そこは信州の片田舎に生まれ育った身であり、どのようにすれば本物のカメラマンになれるか全く

分っていませんでした。ただ、動物たちがたまらなく好きであり、純粋に撮影を続けていたにすぎません。ですから田舎ゆえに私を訪ねて来るようなお客さんなどはなく、今江先生たちに逢ったのが、私にとって最初の〝都会人〟であり、〝文化人〟であったのです。そこで私は、田舎人間まる出しの接待として、それまでに撮影してきた野生動物のスライドを夜遅くまで見せたという訳です。

今江先生はニホンカモシカをはじめとした数々のスライドに、一つ一つ『ウーン』『ヒヤー』といいながら画面にくい入るようにして見ておられました。特にニホンカモシカは、当時としては生態写真がきわめて稀な時だけに、四季を通して撮影してあったスライドに驚かれていたようです。

今江は、すぐれた作家の資質とともに、天成の編集感覚の持主であった。すぐれた才能をもった新人発掘の名手であり、自らの発見した新人を、じつにこまめにめんどうを見、発表の舞台となる出版社や、編集者に紹介していた。

その今江の眼から見て、宮崎学は驚嘆に価する、新人カメラマンであった。写真の構図とかアングル、光のあつかいには、まだ荒けずりなところがあったが、被写体となる

動物の生態には、おどろくほど通じているようだった。
（この青年は、動物の言葉がわかるのではないか）
今江は、スライドを見ながら、その一枚一枚に、「ウーン」とか「ヒャー」と、陽気なおどろきの声をあげながら、その写真のなかに、既成の動物写真家にはない新しさ、動物の気持をつかんだもののすごさを、感じとっていたようであった。
とくに、まぼろしの動物といわれたニホンカモシカの、四季を通じてとった生態写真は、当然のことながらはじめて目にする興味と好奇心を満足させる作品だった。
よくぞここまで接近できたものと思われる距離からとらえた写真で、ふさふさした黒褐色の毛の一本一本までが、つややかに写し出されていた。
暗い緑の森のなかで、餌を食べるカモシカ。目のくらむような絶壁の岩場にたたずむカモシカ。恋の季節となって、雌を追いつめる雄カモシカ。かわいい子づれの母カモシカ。縄張りを用心深く見まわしている父カモシカ。満腹してがれきの谷でひと休みし、一度飲みこんだものを口にもどし噛みなおすカモシカ……。
あるいは、角をといだあとの皮のむけた幹。餌のとぼしい冬に、枝を食べちぎられたオオカメノキ。ねぐらのそばに、うず高くのこされたため糞。ウシと親せきの偶蹄目科

をはっきりしめす、雪の上にしるされたあし跡等々……。
学のとりためたカモシカのおびただしい数の写真を見ていると、まぼろしだった化石動物が、はっきり実在感をもって、うかびあがってくるようだった。
もし、これだけの写真を依頼してとったなら、数年の時間と、ばく大な取材費用がかかるだろう。
「こんなにとらはるには、ぎょうさん時間がかかったんやろなァ。それにしても、カモシカの生態をよく知っていはる。ほんまに、びっくりしましたなァ」
今江は、自らの感動を、廣岡とわかちあうように、その素晴らしさを口にし、ちょっと間をおいて、やわらかい京都なまりで、
「えらいこっちゃ。これだけぎょうさんあったら、本ができるやろ」
と、つぶやくようにいうのだった。
「先生もそう思わはりましたか。……ぼくもいま、一冊にまとまるなと考えてました」
学にその会話は、なにか夢のなかの天使の言葉のように聞こえた。自分の写真が本になる……いつの日か、まぼろしの野生動物で、できることなら一冊の本をつくってみたい、と夢想したものだったが、いまそれが、現実味をおびた話となって、歩みはじめた

のである。

（中学校の落ちこぼれのおれの写真が本になる!?……周囲から『あのバカが、キツネやタヌキを追って、山をほっつき歩いている』と、せせら笑われていたおれの動物写真を、大阪の立派な出版社が本にしてくれる……）

彼は、挫折感にさいなまされながら、バカの一つおぼえのように、動物写真ひとすじにきたことが、間違いではなかったと、思うのだった。

「スライドを見たその夜は、村の小さな旅館に泊まられて」と、その翌日のできごとを、学はつぎのようにつづける。

「翌日は雪の降る中を伊那谷の動物たちを見に出かけました。天竜川に群れる大群のカラスを見たり、さらに中央アルプスへカモシカを見にでかけたのです。どちらも伊那谷にはつきものの身が切れるような寒い場所であり、先生は相当に閉口していたようでしたが、首尾よくすべてを見ることができ大いに満足されていました」

今江は、このときの思い出や、宮崎学が動物カメラマンになった経緯などをおりませて、数年後に『水と光とそしてわたし』というすばらしい作品にみのらせるのである。

13●フクロウにのめりこむ



千趣会の廣岡正勝は、今江との取材を一とおり終えたあと、学の撮影したニホンカモシカの写真を、とりあえず一部、借りて帰社する手はずになった。

学は、話がここまで具体的になると、誰彼なしに、

「おれの写真が本になるんだに！」

と、ふれて歩きたい衝動をおさえがたい気持になった。しかし、実現もしない前にふれ歩いて、もし本にならなかったら、近隣じゅうの笑いものになることを考え、懸命におさえた。

伊那谷というせまい地域に、代々暮らしている人々は、土地言葉で〝せんしょうな〟

というほどの詮索好きと、噂好きの面があった。

いい話題のときには、それなりの評価とよろこびを、表向きにはしめしてくれるものの、裏へまわると、

「あそこの、高校へも行けなかった鳥キチガイの息子が、本を出すなんていっとるが、ホラじゃないかな」

「ふんとに、本なちうもんは、めったにできるもんじゃないずら」

「わしゃあの息子は、東京の大学の文学部ちゅうところを出て、むずかしい本をやたらに読んどるが、本を出してないでなァ」

などと、ひそかに噂の輪をひろげて、溜飲を下げるようなところがあった。

それゆえに、学は両親だけに、

「おれのカモシカの写真が、大阪の本屋で写真絵本にしてくれるっていうに」

と、告げただけだった。

アルバイトをつづけながら、野生動物を追って写真ばかりとっている末っ子を、ややもてあまし気味の両親だった。

本ができることは、よろこびにはちがいないが、丈夫な体になって、きっちりした勤

めをもってくれたほうが、世間体もいいと考える気持もあった。
両親のその気持は、二十歳をこえた学に、痛いほどわかっていた。
「すまんけど、もうちょっと大目にみとってくんな」
彼は心のなかで両親に、そうわびていた。
出版をひかえて、自分をとりまく世界が、モノクロームからカラーに変わったような気持の学は、そのころ、中川村の人里離れた山奥にフクロウの巣を見つけて、毎晩、その生態写真をとるのに、新しいチャレンジを開始していた。
フクロウは、夜行性の鳥で、昼間は木の洞や葉かげにかくれていて、その生態はあまり知られていない〝忍者〟のような鳥であった。
ところが、日が落ちて山が暗黒の闇につつまれると、どこからともなく飛び出し、音もなく飛びかいながら、地上を走る野ネズミやウサギ、小鳥などをおそって、鉄のカギのような爪でとらえ、野ネズミ程度の獲物だったら、丸のみにしてしまうどう猛さをもっていた。
この闇のなかの森の住人をとるためには、夜中に彼らの巣の近くへ陣どり、音もなく飛んできたところを、すばやく見きわめて、シャッターを押さなければならない。その

緊張度たるや、すさまじいばかりだ。
彼は、まず、彼らの鳴き声から、フクロウ仲間の〝言葉〟を読みとろうとした。闇のなかで耳だけに神経を集中していると、深い山のなかには、夜の息吹きがみちてくるのが感じられ、夜だけに通用するオキテがあるようだった。
「ホー　ホー　ホロッコ　ホッホー」
よく知られたフクロウの鳴き声が、梢の上で不気味にひびいてくる。じっと息をひそませて、その声を聞いていると、山の精霊が呼びかけてくるような感じがした。
——話題は横道にそれるが、イギリスの偉大な自然派の詩人ワーズワースに、フクロウと一人の少年をうたった、美しい詩がある。

一人の少年がいた。
ウィナンダーの断岸と島々よ、
お前たちは彼をよく知っている。
幾度となく、黄昏れどき、
一番早い星々が山の端に見えつ隠れつ動きそめるころ、

樹(き)の下に、あるは、うすひかる湖水のほとりに、
少年はただひとり佇(たたず)んでいた。
彼は指と指とを組み合せ、
掌(て)と掌とをしっかり合せ、
口につけては笛(ふえ)のように、
沈黙(ちんもく)せる梟(ふくろう)が答えるために、
ホーホーと真似声(まねごえ)を立てた。

田部重治(たなべじゅうじ)の訳では、このあとフクロウが、少年の真似声に答えて、しめっぽい谷を越(こ)えてさけび、

彼が呼べば梟も、また、叫んだ。
ふるえる音、長い声、鋭い叫び、
そして声高き反響がくり返された。
陽気な騒ぎの狂(くる)える混乱！

　やがて声がと切れて沈黙が来り、
　少年の巧妙な誘引も無駄だった。

とつづいている。

　ワーズワースのこの名作は、学の観察したフクロウの生態にそむかない内容であることがわかる。

「ホー　ホー」の真似声では、フクロウは誘われてこないのが当然だった。

学の、徹夜の観察のつみ重ねによって、あきらかになったところでは、一般に知られたフクロウのトレード・マークの鳴き声は、「ここにいるぞ！」と、オスや周辺のフクロウに知らせるためのものであった。

呼び寄せるためには、「クォッ、クォッ、クォッ」と、やさしい鳴き声をあげねばならぬのだ。

　それはさておき、羽音もたてず、闇のなかを風のように飛ぶ神出鬼没のフクロウの一瞬をねらって、徹夜で山へこもってみても、一夜のシャッターチャンスは二度か三度しかなかった。

そのわずかなチャンスのために、暗闇で目をこらしていると、昼間のアルバイトの疲れが出て、つい泥のように眠りこんでしまう。皮肉なことに、フクロウが現われるのは、ウトウトしてしまうそんな一瞬であった。

「これじゃダメだ、眠らないように濃いコーヒーでも飲まないと……」

学は、夜の闇に負けないほどに濃いブラック・コーヒーをポットに入れておき、眠気がおそってくると、それをガブガブ飲んで束の間の眠気ばらいをするのだった。

しかし、一日か二日おきに、ブラック・コーヒーガブ飲みという徹夜をつづけていると、体が疲れでガタガタになっていくのが、目に見えてわかった。

ある日、冷たいコーラをアルバイト先で飲んだところ、胃袋に鋭いキリを突き刺されたような激痛が走った。思わず腹をおさえ、くの字型になって、へなへなとその場に倒れてしまった。

「宮崎君、どうしたんだ！」

店主がかけ寄って、抱きおこそうとしたが、学の顔は蒼白で、額のあたりに油汗があふれ出ていた。

すぐ近くの医院にかつぎこまれたが、医師は学が、苦しみの合い間に、とぎれとぎれ

にいう症状を聞き、胃のあたりにふれてみて、

「これは胃潰瘍で出血もひどいようだ。わたしでは手におえないから、すぐ大きな病院へ行って手術を受けなくちゃいけないよ」

と、怒ったような口調でいった。

「どうして、こんなになるまでほうっておいたんだね」

医師は、学が徹夜でフクロウの写真にいどみ、眠らないために、濃いブラック・コーヒーをガブ飲みしていたと告げると、肩で大きな息をして、あきれたようにいった。

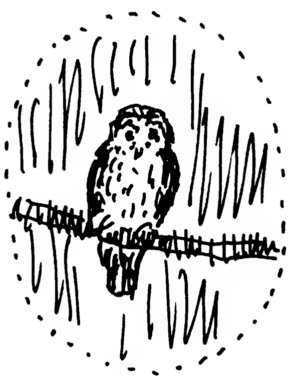
「山でこんなことになってごらん。血をはいて死んでいたところだぞ！」

学は、医者の怒りの声を頭の上で聞きながら、（いっそ死んでしまったほうがよかった）と心のなかで考えていた。

はげしい山歩きで、肝臓と腎臓をやられ、勤めをやめて養生し、ようやく回復しかかったと思ったら、またも死に結びつくほどの大病にかかってしまったのだ。その精神的ショックは、前にもまして大きかった。

そのまま、駒ヶ根市の総合病院に入院して絶対安静から、輸血と薬療法によって、胃潰瘍のほうはなんとか治すことができた。二ヵ月あまりで退院したものの、以前からの

内臓疾患もぶり返して、体調はずっとよくないままだった。
　体が悪いと、気力がおち、前途が真っ暗に閉ざされたように思えてくる。二十歳をすぎたばかりだというのに、もう自分には明るい未来がないと思えてくるのだった。
「いっそのこと、死んでしまおうか……」
　心のなかで、ひそかに自殺を考えてみた。



14●絶望のなかから



挫折つづきの人生だったが、学のこのころはどん底の二年間だった。学は、寝たり起きたりの生活のなかで、いろんなことを考えてみた。

まず、当面、いちばん楽になる方法として彼の頭に浮かぶのは、この世からいなくなることだった。ひと思いに生命を断ってしまったら、どんなに楽だろうと考えをすすめてみるが、その想念をつきつめていったとき、ふっと頭をかすめるのは、

「ここで死んだら、お父ちゃやお母ちゃはきっと哀しむずらなァ」

ということだった。

二十一、二歳になる今日まで、心配をかけっぱなしの両親であった。二人の兄と姉は、真面目に、きっちりした人生を歩んでいるのに、自分は高校へも行かず、中卒で就職した先も、道楽のカメラがこうじて健康を害し、やめてしまった。

それからは、動物カメラマンになることを目ざして、アルバイト先を転々としながら、独立の日を夢みてきた。

そして、千趣会の廣岡正勝と、児童文学者の今江祥智の知遇をえて、ニホンカモシカの写真絵本の出版が決定し、バラ色の未来が開けかかったと思ったのも束の間、フクロウの夜間撮影の無理がたたって、またしても胃潰瘍で倒れてしまっているのだ。

「本が出せると決まったというのに、なんとしたことか……」

学は、前途にポツンと光る出版の希望があるかぎり、頑張らねばならぬと、絶望的な考えを強いてひきもどしにかかった。

「ふんとに、ここで死んでしまったらイヌ死だものな」

前向きに考え方をかえてみると、中学生でオチコボレとしてフルイにかけられた人間が、このまま死んでしまったのでは、なんとしても口惜しい、という考えが、心の片隅に頭をもたげてくる感じがした。すると、

「どうせ、一度だけの人生なんだから、少なくともおれという人間が生きていたんだぞという足跡だけでも、この世にのこしてから死にたい」
という想いが、死と向きあって起きてきたのである。

だがその心意気は、いっこうに回復しない体調のまえに、すぐヘナヘナにくずれて、またも死への抵抗しがたい誘いが、心をしめていくのだった。

そのころ、学は夜の来るのが待ちどおしかった。親に聞こえないように、ふとんをかぶって、声を押し殺して泣けるからだった。

学は、死にたい気持の発作が起きると、そんな夜は、みんなの寝しずまるころあいを見て、ふとんをかぶり、思いきり泣いてみた。

涙がポタポタと、目尻から耳のわきへと落ち、敷きぶとんにしみこんでいく。泣きはじめは、自分がなんともダメ人間で、誰からもとりのこされたあわれな男と思われていたものが、さんざん泣いたあとには、その自虐めいた気分が涙とともに流れさって、不思議とスッキリした気分になれるのだった。

いまひとつ、失意の学を元気づけるうれしいできごとがあった。病後の身で、しばらく野生動物とごぶさたをしている空しさをうめ合わせようと、近くにある小さな動物園

をおとずれたのである。ニホンザルやシカ、山鳥、キジ、カルガモなど、見なれた野生動物がちんまりそろえられた、ささやかな動物園だった。

学は勝手知ったその園内の、なじみの動物たちに、心のなかで「元気でいるかな」と、親しく声をかける気持で、見まわっていたが、

「おや、あれはクマタカじゃないか」

と、つぶやいて、足をとめた。

『野鳥図鑑』で知ってはいたが、生きた実物に会うのははじめてだった。褐色の背に、黒い横帯のある尾羽。後頭部に羽冠をもったその鳥は、射すくめるような鋭い眼と、相手を威圧する鉄のカギのようなくちばしを、凛然と誇示して、止まり木に胸を張って止まっていた。

その姿には、頭に羽冠を飾り、肩をいからして相手を見すえている、インディアンの酋長のような精悍さと風格がみちあふれていた。檻のなかにとらえられているのに、その堂々とした威厳はいささかもそこなわれていなかった。

「立派だなァ」

学は、クマタカの何ともいえない風格にうたれて、その鋭い眼に射すくめられたよう

に檻の前に釘づけになっていた。しばらく、クマタカと向きあっていると、病気で前途を閉ざされた気持になり、死をしきりと思っている女々しい自分が、なんとも情けなく、獲物とねらわれて追いつめられた小鳥のような姿に考えられてくるのだった。

学は、みじめないまの自分を思い、このどん底の境地からはいあがっていくためには、なによりも強くならなければと考えた。

「よし、必ずよくなって、大自然のなかを自由に羽ばたく、雄渾なお前の姿を写真にとってやるぞ！」

不思議なことに、クマタカの生命力にみちみちた迫力と存在感に接していると、学の体内にも、力強いエネルギーがよみがえってくる感じがするのだった。

気分が高揚してくると、モノクロームの世界のようだった周辺が、光のみちた美しいカラーのそれに変わってきたように見えはじめた。

陽転した学のその気持に、さらに拍車をかけてくれたのが、千趣会ですすめられているニホンカモシカの単行本の仕事だった。

写真をとることは、プロの卵の域にたっしている学だったが、それを選別し、物語にくみ立て、ページに割つけして、流れをつくっていく仕事は、はじめての体験だった。

今江と廣岡は、被写体であるカモシカにのみ眼をそそいで、周辺の風景には無頓着であった学に、ひとつの物語としての写真の選び方、季節感のとり入れ方などをそれとなく教えていった。

寒色系だけでまとめている写真を見ると、今江は、やさしい声でひと言、

「赤がほしいですね」

とアドバイスをしてくれた。

その忠告にしたがって、暖色系を一色加えると、写真はみちがえるように深みとひろがりをもちはじめるのだった。

白紙に近い状態だった学に、今江祥智と廣岡正勝という名伯楽がついたということは、鬼に鉄棒をあたえたようなものであった。まだ若く、伊那谷しか知らない田舎者であっただけに、この最初の文化人との出会いは、学の前途にすばらしい衝撃をあたえ、以後の作品づくりに大きな影響をあたえることになった。

二人の物心両面にわたる援助と指導は、宮崎学の最初の本『山にいきる――ニホンカモシカ』（一九七〇年刊）が出版された後も、変わることはなかった。

学は、二人の恩人にたいして、つぎのようにのべている。

「当時、夢にまで見たニコンFに、モータードライブシステムと、ニッコール800ミリの望遠レンズをつけて、私に送りつけてくれたのも廣岡さんだ。また、フィルムを月に三本ほどしか使えなかった私に、一度に二十本ものパックを大阪から送りつけてもくれた。

私はひそかに涙が落ちた。それだけではない、原稿料名目で、毎月少しずつ送金して私を助けてもくれた。さらに、私を励ます長文の手紙もあった……」

子どものころから、あまりほめられた経験はなく、むしろ近隣で、カメラ道楽のバカ息子とみられて、嘲笑の対象でしかなかった彼に、正面きっての励ましと、カメラマンにとっての銃と弾丸である高級カメラとフィルムを、おしげもなく送りつけた廣岡正勝――。

その物心両面協力が、学にどれだけの力づけになったことか。

今江祥智もまた、手紙で学をなにくれとなく励ましつづけたのである。創作家の今江は、

「作品を絶対に〝安売り〟してはいけません」

というのが、毎回の内容だった。

その意味は、「作品が自分で納得のいく構成としてまとまるまでは、たとえ生活が苦しくても、〝小出し〟にして売ってはいけない」ということであった。

この心やさしい、名伯楽は、手紙の最後に、

「あなたの仕事は、全国でかならず一人や二人の人が注目しているはずだから、多くの人を相手にする気持をもたず、注目してくれているひとりの人だけのためにがんばりなさい。そうすれば、多くの人たちが認めてくれるようになるはずだから……」

と、書きそえてあった。

「注目してくれているひとりの人だけ……」今江のその言葉の該当者は、いまのところ今江祥智その人であり、千趣会の廣岡正勝にほかならなかったかもしれない。しかし、その励ましが学にどれだけの力づけになったことか！

今江の心くばりは、度重なる手紙にとどまらなかった。彼は、京都から仕事の打ち合わせなどで上京するたびに、福音館書店だのあかね書房、理論社など、その著書を出版している出版社、親しい編集者たちのところをまわって、

「伊那谷に宮崎学君という動物の言葉のわかるカメラマンがいる。えらい男や、機会があったら彼の写真を使ってみてくれまへんやろうか」

と、仕事へ結びつくよう推挙の労をとってくれていたのである。

その間に、今江祥智は岩波書店から出版した書き下ろし作品、『水と光とそしてわたし』に、宮崎学をモデルにして描き、彼を、自然を愛し、野生動物の心をよく知る感性ゆたかな動物カメラマンに造形してくれたのである。

活字の権威に弱い、理屈家の多い信州の伊那谷に、岩波書店で出した創作児童文学の主人公に登場したということは、たいへんな推奨の役割をはたしてくれた。見向きもされなかったボロ株が、一躍、値上り必至の優良株になったようなものであった。

学は、動物カメラマンとして、評価の定着した後に、

「おれはアルバイトをしていたからこそ、今江先生や、廣岡さんのような方にめぐりあうことができたのだ。そして、子どものころから眺めつづけた、秋から冬にかけて夕焼けの空をおおって、黒い大きな河のように飛ぶカラスの大群のみちびきで、今回の道がひらけたのだ……。カラスこそ、おれの今日ある恩人である」

と、カラスに深い恩義を感じ、感謝する気持でいっぱいになったとのべている。

学校にはいい思い出のない学だった。伊那谷の大自然と、そこに生きとし生ける動物たち、そして彼が最初に会った文化人を〝動物カメラマン〟になるための恩師と考えた

のには、理由があった。
学のような自然児には、ガッチリした受験体制下にある学校教育には、素直になじめない。幅をもったベテラン教師であったら、数学も国語も、地理も歴史もと、オールラウンド好成績をおさめられない学のような生徒にも、なにかの長所を認めて、その方面へ伸びるように指導してくれる。
ところが、未熟な教師とか、いい高校へより多くの生徒を進学させることで評価を高めようとする心貧しい教師は、そのワクからのハミ出しものは切って棄て、早い時期にオチコボレのラク印を押して、ジャマものあつかいにするのだった。
学の学んだ小学校から中学校にかけての教師のほとんどがこのタイプだった。また、伊那谷の風土は、学校の成績のいい子どもをことさらに自慢、賞賛するその一方で、オチコボレには、きわめて冷やかなムードがあった。
ひとかどの動物写真家になるまで、針のムシロにすわらされたような、居心地の悪さがあったのは、その風土がもつ伝統にもてあそばれていたからかもしれない。
しかし、反骨精神のさかんな学は、郷里の風のつめたさと、オチコボレは見むきもしない学校教育のあり方を〝反面教師〟にしたところがあった。

「カメラバカ」「鳥キチガイ」「道楽息子」と陰口をたたかれればたたかれるほど、
「なにくそッ！　いまに見ておれ！」
と反ぱつし、そののしり声をテコにしてきたところがあった。

病気に倒れたときには、ぎゃくにおちこんでしまい、しきりと自殺を考え、夜な夜な涙で枕をぬらしたものだったが、その哀しみの深さ、絶望の重さが、つぎの飛躍のステップになっていたともいえる。



15●三人の恩人たち



動物写真家として、始動しはじめた宮崎学を、ひそかに励まし、プロとしての〝芽〟を育てる役割をになってくれた恩人が、さらに三人いた。

そのひとりは先年亡くなった「鳥類保護連盟」理事、野鳥研究家で、野鳥写真家としても知られた高野伸二であった。

高野と知り合うきっかけは、講談社で出版された『原色・自然の手帖・野鳥』のとりもつ縁であった。十七歳のころで、学はその書名にひかれて購入したが、その本のページを開いたとたん「あっ！」と声をのんだ。

写真の鮮明さ、切り口のシャープなこと。野鳥の種類の多さに、まずびっくりしてしまったのである。
野鳥の生態をとった写真集は、学の書架にいくつかはあったが、高野のその本ほどシャープで、カッチリと決まったものは、はじめて目にするものだった。しかも、そのすべてがカラー写真で、これから野鳥や動物写真にチャレンジしようとしている学には、このうえない手引き書に思われた。
たまたま同じころ、学はいままで見たこともない猛禽類の巣を見つけて、
「新種のタカを発見したのではないか！」
と、胸をときめかせ、夢中になって撮影しているさい中であった。
その野鳥は、鋭いカギ型のくちばしと、けいけいとして射すくめる目などからみて、タカの一種には間違いないものと考えられた。だが、なんとも不思議だったのは、他の猛禽類のように小動物や、小鳥をおそって食べるのではなく、地バチの巣を運んできて、そのなかのサナギや幼虫を好んで食べていることだった。
面白いことに、彼の止まり木の下には、地バチの棚状に、三段から十段にもわたって作られた巣の、一段一段に切りはなされ、なかの幼虫を一虫のこらず食い散らされた空

巣が、ころがっていた。
学は、手もとの野鳥図鑑とてらしあわせて何回も調べてみたが、そのタカと思える色と形の種類はのっていなかった。
「やっぱりこれは、おれが新発見したタカかもしれない。高野さんに聞いてみずら……」
十七歳の少年はぶしつけにも、いきなり高野のところへ写真を同封して手紙を書き、同定（種名を決定すること）してもらおうとしたのだった。
高野からはすぐ返事があり、その野鳥は、ハチのサナギや幼虫を好んで食べるタカであること。形態がクマタカに似ているところから、「ハチクマ」と名づけられ、初夏になると日本へ渡ってきて、秋には東南アジア方面へ渡るという習性。それに個体変異があるということまで、教えてくれたのである。
「そうか、個体変異があるタカだったのか」
学は、その謎が解けたよろこびと、ちょっぴり新種発見の予想がはずれた失望を味わいながら、野鳥に関しては的確に教えてくれる高野伸二の広い知識と、謙虚な人柄に深い尊敬の念をもったのだった。
学と高野の間には、何回かの文通があって、やがて、「伊那谷へ、君の発見したハチ

クマを見にいこう」ということになった。

学は、手紙を通じて知りあった野鳥の権威者を、駒ヶ根駅に緊張した顔で出迎えたが、高野は手紙の文面ににじみ出た、親切でおだやかな人柄そのままの人だった。

野鳥とカメラという二つの趣味が同じということもあって、学は年上の高野と、たちまち昔からの知り合いのような気持になってしまった。

「ハチクマって、神経質な鳥でしょう」

「はい、ものすごくカンの鋭い、警戒心の強い鳥です」

中央アルプスの山中に発見したハチクマの巣へと案内する道すがら、高野と学は野鳥をめぐり、撮影について、深くつっこんだ話をしながら歩いた。

学は、夢中になって、野鳥撮影の基礎的なことについて、質問を重ねたが、高野はいやな顔一つせず、ていねいに撮影のいろはを教えてくれるのだった。

伊那谷をおとずれたこの大先輩を前に、学が一つだけ、自慢したいことがあった。それはクリの木の地上十二メートルほどのところに、直径も厚さも一メートルもある巨大なハチクマの巣を観察するため、十五メートルばかりはなれた樹上に作った見張り小屋だった。

トビからはじまって、ノスリ、チョウゲンボウ、オオタカと、すでに五種類の猛禽類を撮影していた。この間に、学は何回かの失敗を重ねながら、彼らを写す独特の撮影方法を確立していたのである。

〝巻きつけブラインド法〟という、ブラインドの張り方と、それを利用しての撮影の手順であった。

その方法とは、まず、防水のブラインド生地を、風呂敷ぐらいの大きさに幾つも切っておき、観察を決めた高い木の上へ、まるめて運びあげる。つぎに、ころ合いを見はからって、警戒心の強いタカ類の様子を見ながら、一日一時間ぐらいの割合でブラインドを広げてゆき、十日から二十日もかけて、樹上に小さな小屋を作ってしまうという方法だった。

嗅覚も視力も鋭く、わずかな動きにも敏感なワシ・タカに、それとさとられないようすすめる作業であったから、学は自分が大自然のなかにとけこんだ風景の一点にでもなったつもりで、南米の密林にすむナマケモノのように、ゆっくりゆっくり、相手の動きに注意をしながら、作業をすすめるのだった。

学が、それほどの根気と気長さをもって観察小屋を作ったのは、彼らに気づかれ、せ

っかくの営巣を放棄されてしまうことを警戒したからだった。巣を発見されしだい、人間にヒナをうばわれたり、あるいはトリックを用いられて、捕獲をくり返されていた猛禽類は、こと〝二足獣〟に、徹底した不信の念をいだいているようだった。

それで、人間が巣に近づき、おそわれそうな予感をもつと、簡単に巣を放棄して、どこともなく飛びさっていった。

ひとたび、飛び去ってしまったら、そのツガイは、そこへもどることはなかった。彼らの習性として、同じ巣を数年にわたって利用することは知られていた。だから、あせってタカに気づかれ、巣を放棄されてふり出しにもどるよりは、たとえ二十日かかろうと成功させて、同じ巣を何年も利用させたほうが、結果的には早く仕事ができると、学は計算していたのである。

道々、高野にブラインドを張る苦労を説明した学は、

「うんときめの細かい撮影をするためには、一年間で勝負をするよりも、二年でも三年でもかけて勝負をしたほうが、内容がそれだけ濃い写真ができると思います」

と、猛禽類を撮影する考え方もつけ加えるのだった。

「宮崎君、それはいい撮影方法だ。君は若いのだから、じっくり腰をすえて撮影をつづ

ければ、今まで誰もとったことのないすばらしい作品もできるだろう」

野鳥の習性に通じた大先輩は、若い学のいうことに同感をしめしながら、はげましと参考意見もつけ加えた。

新種発見と意気ごんだハチクマも、ブラインド張りに手間どったため、いま巣づくりから産卵、抱卵、ヒナの誕生を終えた段階へきていた。今年撮影できるのは、各ステージの後半になり、全ステージをとるためには、来年さ来年もとって、つなぎ合わせなければならないわけだった。何年にもまたがる撮影だったが、学が先輩の写真に負けない作品を生み出すためには、とにかく時間をふんだんにかけることによって、いままでに誰もがとってないショットをものにしなければと考えていた。

高野伸二は、自分よりはるか年の若い同好の士が語る新しい撮影方式に、たのもしいものを感じながら、自らの開発したノウハウもおしげもなく学に公開した。高野と会ったことは動物写真家の宮崎学の将来に、はかりしれない刺激をあたえたのだった。

ところが、高野とのめぐり会いがつづき、撮影の手ほどきを受けていくうちに、学の写真はしらずしらずのうちに〝高野調〟になっていることに気づいたのである。

被写体のねらい方が、高野の写真にそっくりとなっていたのだ。

「これから、新しい動物写真をとろうとしているおれが、人とおなじようなねらい方をしていたのでは、ぜったいに越える写真をとれるはずがない……」

学は〝高野調〟でかたまってこのまま進んだのでは、行き着く先はしれたものでしかないと、気づいたのだった。

宮崎学は、ここまで考えたとき、カモシカを追っていたときのように、初心にかえって、被写体を限定し、その動物の生存のすべてがにじみ出てくるような写真をとるべきだ！ と考えをめぐらしたのだった。

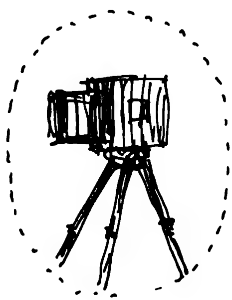
「いま、おれにできることといったらなんずらや」

伊那弁でそうひとりごとをいって、あれこれ考えたとき、絶望の淵から再起のきっかけをつくってくれた、あの威厳と自信にあふれたタカこそ、これからのテーマではないか、と思えてきたのである。

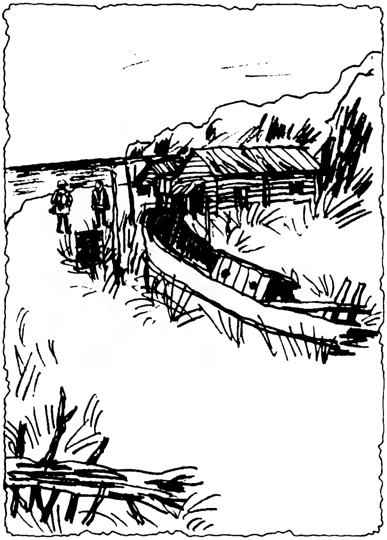
ワシやタカ——猛禽類の仲間は、理屈ぬきで姿も形も立派な鳥だった。眼はけいけいとして鋭く、カギ型のくちばしと鉄をもくだきそうな爪。肩をいからし、胸を張ったその姿は、孤高な戦士のようで、なんとも悲壮感にみちた美しさがあった。

学が、彼らにすごく魅かれたのは、この鳥のもつ気品と美しさにあったが、いま一つ

は数が少なく、まだ生態もさだかではない――ニホンカモシカと同じように、まぼろしに近い存在にあらためて気づいたからだった。
「めったに見かけない鳥であれば、撮影はとてもむずかしいにちがいない。そういえば、いままで、猛禽類の胸をうつ野生の姿をとった写真をあまり見ていないが、きっと、被写体の撮影困難さもあるのだろう……」
学は、野生での彼らの生きざまをとることによって、その生態があきらかになり、理解され、保護にもつながっていくとしたら、一石二鳥、いや三鳥の仕事になることだろうと考えてみた。



16●ワシとタカをねらって



高野伸二にたびたび会うようになって、親しさもいっそう深まってきたとき、学は日本で繁殖している猛禽類のすべてを、自分の手で撮影してみたいと、夢のような希望をのべるようになった。

「すべてのワシやタカを……」

野鳥の権威、高野伸二は、学のその言葉を聞いたとき、一瞬、彼の顔をのぞきこむように見、それから遠くへ視線を投げて、

「それはたいへんなことだねえ」

と、肩で大きく息をして、日本にいる十六種にのぼるワシやタカの多くが、人里遠くは

なれた高山や、南の孤島、あるいは断崖絶壁に生きていて、容易に近づけないことなどを話してくれるのだった。

「獲物に魚を主としているオジロワシは、日本で見られるワシだが、北海道の秘境、知床まで行かぬとお目にかかれないし、カンムリワシは沖縄八重山地方の西表島と石垣島あたりでないと見ることができない。まだ、カンムリワシの営巣の例は発見されたことがないのでね」

高野は、先輩として、その撮影がきわめてむつかしい、覚悟のいることを説明したうえで、

「しかし、君だったらできる。たいへんかもしれないけれど、やってみたらどうですか」

と、はげましの言葉をそえ、ワシやタカに関する資料や情報を、おしげもなくつたえてくれるようになった。

その高野から、

「オジロワシを見に北海道へ行かないか」

との誘いを受けたのは、日本で繁殖する猛禽類、すべての撮影法を打ちあけられ、はげ

まされて間もないころだった。

学にとって、北海道は未知の地だった。

エゾシカや、シマフクロウ、ヒグマなど、本州にはいない野生動物がおり、それらの生きものは、学の撮影意欲をおおいにそそっていた。しかし、当面の被写体であるオジロワシの観察行は、願ってもないチャンスだった。

オジロワシは、その名がしめすように、尾の部分が白い巨大な海ワシだった。北海道だけに生息していて、彼を見るためには当然、日本の北端まで出かけないことには、かなえられないわけだった。高野伸二は、その観察の旅に、若い宮崎学と、動物や鳥の絵を描かせたら定評のある、イラストレーターの藪内正幸の二人を誘ったのである。

学は、藪内については、絵を通じてすでに知っていた。鳥やけものの生態に精通した、その迫真力にあふれた絵は、野生動物好きの学の胸をときめかせていた。

「どうやって、こんなにくわしく生態を知ることができるのだろう」

こと伊那谷にすむ野生動物については、誰にも負けないと自負していたが、藪内はゾウでもライオンでも、学の知らない動物を、皮膚の細いヒダにまで分け入るように知りつくしていた。

この藪内は、一方で無類のワシとタカのファンで、その点、学と好みはピッタリしていた。藪内をよく知る今江祥智が、かねがね引きあわせてあげようと学に約束していたのも、両者の動物好き、わけても猛禽類には目のないことをよく知っていたからであった。

そのあこがれの藪内正幸に、今江が引きあわせるよりも早く、高野が引きあわせることになったのである。

昭和四十七年の夏で、二十三歳の学は、ガソリンスタンドでアルバイトをしている身であった。このときの学は、悪路の運転に自信をもっているということで、道中の車の運転は、彼が受けもつことになった。

東西に屏風を立てたような山脈の狭間、伊那谷に生まれ育ってきた学だった。はじめての北海道旅行は、北欧か北米の原野を走っているような広漠たるものを感じさせた。

あこがれのオジロワシを、霧の切れ間にかいまみたのは、根室の海岸を走っているときだった。この地方の名物といわれる濃い霧が、真夏というのに一帯を乳白色につつみ、視界をとざしたその一瞬のできごとだった。

そのあたりの海岸には、オジロワシが見られるといわれていたが、白一色の霧の海で

はとても無理と考え、用心して車を走らせていた。

——と、一瞬霧が薄く切れ、青空がほんの少しのぞいたのだ。その切れた空に、一羽の巨鳥(おおとり)が、幅広(はばひろ)いつばさをゆっくりと羽ばたかせながら、舞(ま)いあがっていった。ゆうゆうとした羽ばたきには、息をのむような王者の貫録(かんろく)があった。

「あーっ、オジロワシ！」

急ブレーキをかけ、その巨鳥の行方(ゆくえ)を目で追おうとしたが、切れ間はすぐ残霧(ざんむ)にとざされてしまい、またはてしない乳白色一色の世界となって、トレードマークの尾の白さを見定める間もなかった。

「くやしい！　霧さえなかったらなァ」

ハンドルをたたいて残念がる学に、高野は、

「知床でまた見ることができるでしょう。あそこでは、オオワシも見られるかもしれないよ」

と、なぐさめ顔にいった。

高野の予言どおりに、二日後、知床半島でふたたびオジロワシに出会うことができたのだった。

日本最後の秘境といわれる知床は、海から絶壁がそそりたち、千古斧を入れない原生林が山々をうずめていた。オジロワシは、その絶壁の白い波がくだける岩場に、海を見下ろして羽根をたたんでいた。

ワシ特有の威厳にあふれ、尾羽の部分はその名のように白かった。

学は息をのんで、双眼鏡でこの巨鳥の羽根の一枚一枚も見のがすまいと、眺めつくしていた。その学の後ろから、ぶっきらぼうに、

「なにやってんだ」

と声をかけてきたおじさんがいた。

「……」

学は、突然の声に、すぐ言葉を返せないでいると、

「おめえどこから来たべさァ、内地かァ」

と、つづけて聞いた。本州のことを内地なんていわれたのは、はじめての経験だった。

「ええ、内地の信州は伊那谷から来ました」

学は、伊那谷といっても通じるはずはないと思ったが、生まれ育った谷間を、どうしても名のりたい気持だった。

「信州？……えらく遠くから来たんべな。あそこには海がねえから、海ワシは見られないど。わしはここに番屋を持っていて、オジロワシとは顔なじみでなァ」

「そんなによく見られるのですか」

知床の海岸に番屋があれば当然のことだったが、学はそのひと言にも体がしびれる思いだった。

「うわーっ！　いいなァ」

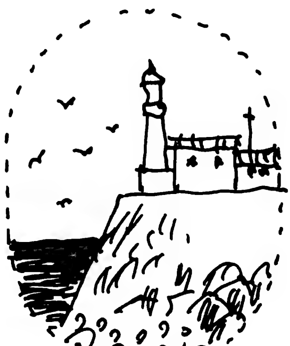
学は、信州の山のなかから、わざわざ北海道まで来たのも、この土地にしかすまない猛禽類のオジロワシや、チュウヒ見たさからだった。そして、内地では見られぬ彼らを、是が非でも写真にとりたい一心であることを、学は番屋の主人に懸命に説明したのだった。

高野伸二も、途中から二人の会話に加わりこの若い青年が、いかに熱心にワシやタカを追いもとめているかを、口ぞえしてくれた。

言葉は荒かったが、番屋の主はいい人で、ワシが巣をかけていたといった話や、季節によって変化していく海ワシの生態を、こと細かく話してくれたうえで、

「あんたがそれほどとりてえんだったら、オジロワシが巣づくりをする時期に呼んでや

るべ。じっくり腰(こし)をすえて、とりかかるといいど」
と、ことオジロワシに関する情報を、伊那谷まで知らせてくれることを約束してくれた。
一つのテーマを、十年単位で考えている宮崎学にとって、番屋の主人の協力は、なにものにもかえがたいよろこびだった。



17●先輩に学ぶプロ魂



動物のプロカメラマンとなる宮崎学に、大きな恩恵をあたえたもうひとりは、昆虫写真家の栗林慧であった。

栗林は、ある意味ではカメラマンとしての学に、決定的な影響をあたえた人で、後年、学は自らのカメラ改造工房を持ち、動物の一瞬の生態をとらえるために、数々のアイデアを開発するが、その工房と、アイデアを触発したのが、栗林慧だったのである。

学が栗林の存在を知ったのは、写真雑誌に発表された彼の見事な写真からだった。豆粒ほどの昆虫を、何十倍かのクローズアップで、きわめてシャープにとらえていた。

一例をあげると、沖縄にすむオバナワスズメが、花の蜜を吸う一瞬をとった写真があるが、羽根の微動がつたわってくるような感じで、しかも彼らの生態に忠実なねらいと、アングルでとらえていて、見るものを常に驚嘆させてやまないのだった。

「どうやったら、こんなすごい写真がとれるんずら」

学は、雑誌に発表された栗林の写真を見るたびに、その見事な作品に息をのみ、写真家としての栗林の撮影方法や、考え方を聞いてみたいと思うのだった。

芸術家の一面と、職人的な偏狭さをもつのが、この世界の人間には多い。撮影の秘密にふれることは、間違ってもきくものではなく、こっそり盗みとるのがよしとされた。師匠と弟子の関係でも、盗みとるのが一般的で、下手にその極意にふれようものなら、破門されかねない気難しさも、厳然としてあった。

しかし、伊那谷育ちの二十二歳の若い学は、写真界をおおうしきたりには暗く、そのころはまだこわいもの知らずののん気さがあった。

意を決した学は、どうしても会いたい一念で、当時栗林の住んでいた東京の高井戸の自宅をたずねていった。紹介状もない、いきなりの訪問だったが、来意をつげると、

「ああ、君の写真は見ていますよ」

と、おうような態度で応接間に通してくれた。

小さな昆虫をとっている写真家だったが、がっちりした体格で、見るからに丈夫そうで落ち着きはらっていた。病気から回復したばかりの、無理のきかない学から見たとき、その体格ともの腰は、威圧感にあふれていた。十歳年上というのに、キャリアといい、作品の結晶度といい、宮崎学とは雲泥の差があるように思えた。

しかし、こと写真の話になると、その考え方は新しく、前衛的でさえあった。既存のカメラで、どうやって、小さな昆虫を見事なほどにクローズアップしてみせるのか。また、昆虫の複眼の微小なひとつひとつが、画然ととれるのは、どのように接近し、どのような倍率のレンズで撮影しているのか……。学には聞いてみたいことが山ほどあった。

ところが、栗林は、学の来訪の意味は先刻承知していて、

「ちょっと、ぼくの工作室を見てみますか」

と、自宅の一室に設けた工作室に案内してくれた。ドアを開けたとたん、学は、

「うわっ！　カメラ工場みたい！」

と、目をまるくして、入口で一瞬身をすくめた。

その室には工作道具が整然と、ところせましとならべられていたのだ。

中学を卒業して、すぐカメラ工場に勤めたことのある学に、そこに並べられている工作道具が、カメラを改造するためのものであることはすぐわかった。

（そうだったのか……撮影目的のためには、既成のカメラはどんなに改造したっていいのか。自分だけに使いこなせるよう、あらゆる工夫をし、そのための装置をつくり出してこそ、栗林さん独特の、誰の追従もゆるさない傑作写真が生まれるのだ……）

学は、おびただしい工作道具を眼で追いながら、その室に充満している栗林の昆虫写真一すじにかけた気迫と情熱に、圧倒されつづけた。

息苦しいほどの時間だった。

だが、その息苦しさは同時に、学に大きな希望と自信をあたえてくれた。それは、彼がカメラ工場で使ったことのある機械や工作道具が、いくつか設置されていることだった。

その機械や道具だったら、学にも使える自信があった。それまで、買ったカメラは、貴重品のように大事にあつかい、望遠レンズをとりかえるとき以外は、レンズ一つもとりはずししないほどにしてきていた。

改造なんてとんでもないことで、考えてもみなかった。だが、撮影目的に合わせて、

どんどん改造してもいいのだ——と栗林改造工房で教えられてみると、カメラ工場に勤めていたことが、すばらしい特技となって、

「おれにだって改造はできるぞ！」

という自信がわいてくるのだった。

八百ミリ、千二百ミリにもおよぶ超望遠レンズを使うようになって、それを支えるための頑丈な三脚は、特注してつくってあったが、まだ、レンズの改良までには考えがおよんでいなかったのである。

たとえば、望遠レンズをニコンに合わせて持っていても、オリンパス、キヤノン、ミノルタといった他のメーカーのカメラには、レンズマウントが不統一のために使えないことがあった。しかし、フォーカシング・ユニット機構に工夫をしてみれば、あらゆる一眼レフカメラに装着できるわけで、その改良を自分でやれば、少なくとも超望遠レンズに限っては、問題が解決できるはずであった。

また、超望遠レンズを使っていて、いつも舌うちするほどいまいましく思うことは、回転式三脚座と称する、カメラのタテ位置、ヨコ位置変換のノブが、ことごとく右側についていることだった。

右側についているということは、右手で操作することを意味していて、動きの早い被写体を追っているときには、絶対的に不利で不便な〃人間工学〃を無視した愚劣な設計と思っていた。

なぜなら、カメラのシャッターボタンは、百パーセント右側についていて、動物の生態を追ったり、報道写真など、動きの早い被写体をねらっているときには、一刻一刻変化するスポーツ、シャッターチャンスにそなえて、右手はいつもカメラボディをホールディングしながら、シャッターボタンは右側の人差し指でキープしていなければならない。そして、その姿勢で、カメラの水平をたもつために回転式三脚座を動かさなければならないことがあり、その場合、右手を離してノブをまわさざるをえず、一瞬のチャンスをねらうカメラマンには、ナンセンスのきわみの操作を強要していることだった。

人間の手の操作を考えたとき、右手はカメラのボディをにぎったままで、左手で水平操作をしたほうが、どんなにか早く、確実であるかは当然であった。そして、水平を決めた左手は、そのままピントリングへと移動させればいいわけで、これらの問題はただ一つ、回転式三脚座のノブが左側についていれば解消するのだった。

撮影のたびに不便を感じ、腹をたてながら、しかし、カメラメーカーで回転式三脚座


先輩のアイデアをさっそく生かした“宮崎工房”

のノブを右側につけてあるかぎり、それはそれで不可侵のオキテのように考え、しかたなく従っていたのだった。それが、栗林のように自らの手で改良がすすめられるとなると、難問は一息に解決するわけだ。

「眼からウロコが落ちたとは、こういうことをいうのかなァ」

学は、さっそく、宮崎カメラ工房をつくらなければと、思いをはせていた。

栗林慧には、会うたびに教えられた。

だが、彼は後輩の宮崎学に、具体的な写真のとり方は、なにひとつ教えようとしなかった。改造工房を見せ、被写体をねらうカメラをセットし、一瞬の生態をとらえる自らの行動力で、それをしめしたにすぎなかった。

動物と昆虫と、ねらう被写体は異なっていても、学の心のなかには、教えをこい、解

決しなければならない問題が、つねにあった。その問題意識をもって、栗林に会っているかぎり、なにげない言葉、カメラをかまえる姿勢、使用しているレンズ、シャッター速度……そのひとつひとつが、一万語を上まわる教えになり解答につながっていった。

さらに、栗林の発表する作品を見ることによって、大先輩のアイデアのひらめき、なにをどうねらってシャッターを切ったのか……などが浮かびあがってくるのだった。

「そうだったのか。この昆虫をとったときの栗林さんの気持は、この微動する羽根の動きをとらえようとされたのか……」

たった一枚の写真だったが、言葉や文字をはるかに越えた迫力で、昆虫の生態を忠実につたえ、もしも彼らに心というものがあるなら、その心の動きまで写し出しているようだった。

栗林から、写真をとるうえでの具体的な教えを受けなかったことは、結果的には学にはよかった。

（あるアイデアのためには、自らの力でその実現をはからなければならないこと、そのためには開発しなければならない装置も必要であり、また、それを使用する実行力もいる）

学は、栗林から啓発された結果を、このように肝に銘じ、

「いやしくも、プロの写真家たるものが、すべてひとりの力でできないようでは、とてもプロとはいえないな」

と、写真一すじに生きるものの厳しさと心がまえを、自問自答するのだった。

二十歳前後という若い時代に、今江祥智をはじめとする、動物カメラマンの道を決定づけるすばらしい人々に会えたことは、幸運だった。

中学卒でアルバイト生活——。

一般的に見たら、ハンディと思える立場が、動物カメラマンを目ざす宮崎学には、逆にプラスに作用していったのだ。

むろんその裏には、伊那谷の風土と、幼いころのいたずらや遊びによってつかんだ体験の数々。ふつうの人には聞こえない動物の鳴き声を聞きとれる耳と、眼をもっていて、彼らのサインを絶対に見おとさない自信の裏づけがあった。

それに加えて、いったん目的とする被写体を決めたら、厳冬の山中であろうと、幾夜にもわたる真っ暗闇の張りこみであろうと、時間も費用ものともせずに、徹底的にこだわり、せまっていくねばりがあった。

18●ようやくひらけた道



信州の山のなかに、すごい動物写真をとる若者がいる……。

二十歳そこそこで『山にいきる――ニホンカモシカ』を出版し、カメラ雑誌にときどきすぐれた動物写真を発表する宮崎学の存在は、東京の出版社にある程度は知られるようになっていた。

しかし、伊那谷に生活の拠点をおき、ニホンカモシカならそれ一本槍。ワシ、タカをねらったら、ほかの野鳥には見むきもせず、猛禽類のみをねらいつづける生き方は、異端視されていた。

それまでの動物写真といえば、広く、浅くゾウもとればライオン、ゴリラ、ワシ、タ

カ、フクロウと、なるべく多くの種類を、擬人化したアングルでとらえるというのが、主流をなしていた。

写真で生活を成り立たせるためには、当然の成りゆきであった。

ところが宮崎学は、その主流を歩まず、しかもとった写真を〝切り売り〟しない。三年、五年後の完成をめざして、がむしゃらにテーマを追いつづける。よくいえば、より大きな成果をねらって、先行投資をつづけていることになるが、霞を食べて生きているわけではなく、生活は当然苦しいものだった。

しかし、プロとしての宣言をしている手前、必要な器材は購入しなければならず、フィルムの消費量もアマチュア時代の比ではなかった。学は生活費の足しにと、新進カメラマンとして名を知られたころになっても、工事現場のダンプに乗ったり、電話線を道路に埋める肉体労働をやっていた。

ときには「若い身空で、なにもそれまでして頑張らなくても」と、ふと心がくじけそうになることがあった。

そんなとき、世に出すきっかけをつくってくれた今江祥智が、励ましの手紙のなかに書いてくれたつぎの言葉を、心によみがえらせて、自らの励ましにするのだった。

「君の仕事はたくさんの人からすぐに認められないかもしれない。しかし、君に注目し、君を認め、君に期待している人が、日本全国に一人か二人はいる。君を認めない人のことは気にかけず、君を認めるほんの一人か二人のためにと思って、頑張りつづけなさい……」

今江は、そして「安売りをしてはいけない」と、安易な生活に流れることも、きつくいましめていた。

学は、その恩人の言葉の前に、歯をくいしばっても頑張らなければと思った。

千趣会の『山にいきる』から五年目に、あかね書房から『ニホンカモシカ』という写真絵本が出るはこびになったのは、学の苦しみに耐える生活を見かねた、今江の配慮からだった。児童文学を通じての友人であった、当時のあかね書房編集長の山下明生に、

「伊那谷にニホンカモシカのええ写真をとる青年がいてます」

と、紹介の労をとってくれたのだ。

百巻を目ざして、昭和四十五年からスタートしていた「科学のアルバム」の一冊だった。

このシリーズは、昆虫から動物、植物、鉱物、宇宙のはての星までをテーマに、その誕生から成長、衰微、死んでいくまでの変化を、刻々と写し出して、子どもたちに〃生命

の神秘〃と科学する心を目ざめさせようというものだった。
一つのテーマを決めて、三年でも五年でも追いつづける学の動物写真こそ、そのシリーズにもっとも適したものといえた。
山下から出版の話が持ちこまれたとき、今江祥智の配慮とともに、学を二重の感激にひたらせたのは、既刊のアルバムのなかに、尊敬する栗林慧の『アリの世界』『ミツバチのふしぎ』があることだった。
「栗林さんの写真が出ているんだ！」
聞けば『アリの世界』は名著の折紙つきで、学の本の後に『クモのひみつ』の出版も予定されているということだった。
学の『ニホンカモシカ』は、三十四巻目の本で、動物の部門では、岩合徳光の『ライオン』『野生ゾウの世界』、西川治の『ニホンザル』、清水洋香の『野生ウマの生活』などが出されていた。
動物写真では、自分よりはるかに先輩たちであった。その先輩たちと肩をならべて、ニホンカモシカがまた一冊の本になる。
学にとって二冊目の本だったが、『ニホンカモシカ』は、私生活のうえで後半の人生

に大きな弾みをつけるスプリング・ボードとなった。
それは、この本の印税三十万円で、かねてから恋仲だった女性と、結婚に踏みきったことだった。
彼女とは、カメラ工場で勤めていたころからのつきあいで、数年ごしになっていた。いずれは一緒になりたいと思っていたが、生活のかせぎを、すべて写真につぎこんでいる苦しい状態では、結婚など夢のような話であった。
そんなときに、三十万円の印税がもらえることになったのだった。写真の切り売りはせず、アルバイトの収入以外にこれといった金の入る道がない学にとって、まとまった三十万円は、たいへんな金額だった。
「よし、この機会に結婚式をあげてしまおう」
二十五歳という年齢は、やや早婚といえる時代であったが、学がこの機会に結婚を覚悟したのは、彼女が学の歩んできた道のすべてを知っていて、そればかりか彼女の給料から、しばしばフィルム代などを拝借していたという大きな借りもあったからだ。
しかし、ささやかな結婚費用は捻出できるメドはついたが、花嫁をむかえるためには、相手の家へ結納金を持っていかなければならない。しきたりを重んじる伊那谷では、と

くにそのあたりのけじめをつけることが大切だった。さもないと、駈け落ちのように思われ、孫子の代まで、借りを背負うハンディを覚悟しなくてはならなかった。

学に、そんなよぶんな金の持合せはもとよりなかった。しかし、しきたりは重んじなければならない。このさい、学にできることといったら、印税の三十万円をそっくりそのまま、結納金にまわすことであった。

三十万円という金は、学には大きな金に思えたが、昭和五十年当時の伊那谷の相場にしては、あまりにも低い金額であった。百万円が当り前の時代となっていたのだ。

かといって、ない袖はふれない。

「しょうがないで、印税を結納金にしよう」

結婚式の費用は、当然なくなってしまうわけだった。が、友人たちに相談すると、

「そんなこと心配することはないずら。会費制でやりまいか。それがいちばんいいに」

と、会費を集めて盛大に祝ってくれることになった。

まぼろしのけもの、ニホンカモシカをとりたい一心で山へ通い、過労から体をこわして、一時は絶望のあまりに自殺までを考えたが、そのニホンカモシカの写真が、二度にわたって本になり、学の労苦にむくいてくれたわけである。

人生とは、まことにはかり難い面があった。

とくに、あかね書房の『ニホンカモシカ』は、このとき伴侶を迎える直接の手助けをしてくれたばかりか、後に版を重ねて、家計を助けてくれる〝孝行息子〟に、成長してくれた。

学はそのきっかけをつくってくれた今江祥智と、いまでは書き手にまわって児童文学者になっている山下明生に、足をむけて寝られない心境であった。

いまひとつ、結婚へふんぎるのに力となった出版物があった。それは、百科事典で知られた平凡社から創刊された「アニマ」という動物専門雑誌が、学の撮影姿勢を高く評価して、スタート時点から写真の掲載を要請してきていたことだった。

一つのテーマにそった仕事の完結まで、写真の切売りや、安売りはきつくいましめていた学だったが、「アニマ」の編集方針は、動物たちの世界を深く掘りさげた、より生態的な写真をカメラマンにもとめる厳しい姿勢でつらぬかれていた。

既刊雑誌にはなかった、そのシリアスな動物専門雑誌から、白羽の矢をたてられ、寄稿家の一人にえらばれたことは、名誉でさえあった。

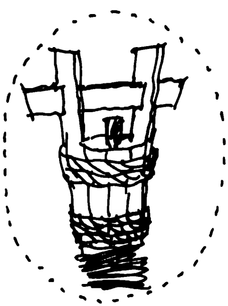
学は「アニマ」の要求する写真がとれるかとれないか、不安な気持も一方にあったが、

なんとか努力しだいでは、自分でもお役立ちできるだろうという自信も、ちょっぴりあった。

その自信の裏づけになったのは、あのまぼろしのけものといわれたニホンカモシカを、二年、三年ごしで追いもとめて、その生態を執念強くとりつづけた体験だった。

加えて、夜といわず、厳冬の身も凍るようなときにも、たった一人、苦しさと孤独にたえてきた愚直なまでの根性——。

さらにどんな野生動物でも、その生息地をさがし出せる独特なカンのようなものが、自分には絶対あるという自信だった。



19●自然は眠らない



ニホンカモシカの写真絵本を二冊出したあと、宮崎学の三冊目の出版となったのは、昭和五十二年に福音館書店からの『ふくろう』であった。

フクロウは、五年がかりでとりつづけていたテーマであった。生まれ育った中川村の人里はなれた山中の、老松の洞に巣がかけられており、少年のころから勝手知った鳥だった。

この鳥は、一つの巣を何世代にもわたって使う習性があった。夜行性で、闇のなかでのみ行動をしているので、その生態はあまり知られていなかった。

学は、まぼろしのけものといわれたニホンカモシカに魅かれたと同じように、フクロ

ウの未知なところに撮影意欲をそそられた。それと、この鳥は、丸顔でまんまるい眼が前面にならび、人間にも似ていること、羽音もたてずに闇のなかを風のように飛ぶ姿が、なんとも神秘的で魅力に富んでいた。

しかし、その生態をとるとなると、夜間に限られてくる。夜ごとに森閑と寝しずまったフクロウの山へ、たったひとり出かけ、睡魔とたたかいながら、撮影にとりかかったが、過労から胃潰瘍にかかり、いちどはあきらめかけた仕事だった。

再チャレンジするにあたって、フクロウの生態や習性を徹底的に調べ、そのうえでライティングやアングルを工夫し、これまでにない生態写真をとろうとこころざしたのである。

まず、フクロウの鳴き声から、彼らが仲間になにをつたえているのか調べてみた。

「ホー、ホー」という鳴き声は、先にのべたように「ここにいるぞ」という周辺の仲間やメスに知らせる信号であった。

冬から早春にかけて、ニワトリの鳴き声のように「クォッ、クォッ、クォッ」とオスがしきりに鳴く時期があるが、これはメスが卵を生む巣を、オスが作っている知らせで

あった。
その巣づくりがすむと、オスは木の洞から出て「クオッオ、クオッオ、クオッオ」と、尻あがりの鳴き声をあげる。
学が調べた結果では、それはオスの縄張り宣言のようであった。
やがて、夫婦のカップルができかかり、オスが心をこめた巣へ、メスを案内してくる。
「クオックオッ、クオックオッ」
木の洞の巣へ入ったオスが、こびた鳴き声でしきりとメスを誘いこもうとするが、メスは、
「グァオ!」
と、鋭い鳴き声をあげて、その誘いになかなかのってこない。
秋も深まり、すんだ空に月がぽっかり浮かぶころになると、しずまりかえった山の空気を引きさいて、
「ギェッ! ギェーッ! ギェーッ!」
と、絶叫するような鳴き声をあげるようになる。
学は、子どものころ、秋の深まりとともに、夜の闇を通して聞こえてくるこの不気味

な鳴き声におびえ、父親に、

「お父ちゃ、あれはなんの鳴き声な」

と、問いただしたことがあった。

「うん、あれはなァ、タヌキの子わかれの鳴き声だ。生まれた子どもが大きくなり、いよいよ親からはなれなければならなくなったとき、悲しがって鳴きかわす声だよ」

と、教えたものだった。

父親の教えは、村の老人からの聞きつたえであった。学はその教えを、三十年近く信じて疑わなかった。

ところが、フクロウの山へ入って、生態観察をつづけていると、その鳴き声はタヌキではなく、フクロウのメスがあげていたのである。

メスがその鳴き声をあげると、オスがなだめるように、

「コッコオッ、コオー」

と鳴きはじめる。

学は、そのやりとりを聞いていて、

「あれは、前年結ばれていた夫婦関係が、子育てをすませたあと解消し、今年はまだ仲

よくなっていない状態なんだな」
という解釈をつけた。
　事実、幾晩かメスのその鳴き声と、オスのなだめる鳴き声が飛びかったあと、
「コッコッコオー」
とオスが鳴きはじめると、メスが、
「カー、カー」
とこたえるようになり、止まり木の二羽の間かくは、ぐっと近寄ったものとなった。
　夫婦関係の成立が見られるのは、この鳴き声がとりかわされるようになった後だった。
オスとメスの愛の成就のためには、オスが野ネズミなどの餌をメスに贈る儀式があった。
　そのやりとりは、オスが「ホー、ホー」と鳴き、つづいて「コォッ、コォッ、コオ、コオ、コオ」と鳴くと、メスは「ガー、ガー」とこたえて、その餌のプレゼントを受ける。ここではじめて、愛を受け入れるムードが生まれ、交尾をこころみるのはこの後だった。その瞬間、メスはあまえたように「ピー、ピー」という鳴き声をあげるのだった。
　メスが抱卵のために、巣ごもりをはじめるのは、この愛の儀式が終わってからだった。
　学は、暗闇のなかで、耳に全神経を集中させながら、フクロウになったつもりで彼ら

を観察したうえ、いよいよ撮影にとりかかる準備にかかった。

まず、最初にこころみたのは、フクロウのすむ山を明るくする工事であった。山里の最後の人家から、一・六キロメートルはなれたフクロウ谷まで、学は電力会社にたのんで電柱を立ててもらい、電気を引いたのだ。

そして、はじめは弱い光から、少しずつルックスをあげていって、フクロウに光をなじませ、最終的には三千ワットもある明りが、フクロウ谷全体を照らし出すようにしたのである。

夜行性の野鳥に、照明をあてるという計画は、はたからみて、ナンセンスのきわみのように考えられた。

「バカバカしいことだ。フクロウはおどろいてどこかへ逃げていってしまうだろう」

大部分の人々はそう考え、実行をちゅうちょするはずだった。だが学は、フクロウの習性を調べていて、この計画に充分な成算をもっていた。

彼らは夜行性ではあったが、村や町の外灯のあるところまで、獲物をもとめてやってきていたのだ。人家の多いところは、彼らの大好物であるドブネズミや野ネズミが集まっているからだった。

その行動から類推して、山のなかでも、徐々に光の度をあげていけば、ならすことはできるはずだと考えたのである。

つぎに、学はフクロウの好んで止まる木と梢をしぼりこみ、その場所に焦点を当てたロボットカメラとストロボを、設置していった。止まり木を限定するためには、彼らの糞の落ちている場所を調べてみた。フクロウは、ワシやタカのように、糞をピューッと飛ばさず、ポトンと真下に落とすので、よく止まる枝の下には、糞がたくさん落ちていた。

それと、フクロウは枝のあまり茂らないカラッとしたところを好む習性があった。

学は、その枝ぶりと、糞の落ち具合から判断して、もっとも止まる確率の高い枝をえらび、そのあたりにカメラを設置した。願わくば、フクロウがカメラにたいし、前むきに止まってくれることだった。さもないと、今までの努力がムダになる。

しかし、前むきに止まるか、後ろむきに止まるかは、フクロウの勝手だった。

究極の工夫として、学は枝ぶりのいい枯木を山から見つけ出してきて、見通しのいい谷間に立て、その下にタテ、ヨコ三メートル四方ぐらいの野ネズミの落とし穴を掘った。

山から走り出してきた野ネズミが、その穴のなかにストンと落ちるしかけだった。い

ちど落ちると、四囲を波板で囲っているため、かけ上がれないはずだった。
学が、そのしかけを工夫したのは、
「よい止まり木を立てれば、かならずそこへ来てくれる」



フクロウ谷のあちこちには手づくりの観察小屋が…

という読みと、その止まり木の下に餌があれば、鋭い眼と聴力で確実に探知し、つかまえに舞いおりてくると確信していたからだった。

これだけの大がかりな撮影の準備をしたうえ、フクロウ谷を眺められるよい位置に小さな観察小屋を建て、簡単な寝具と、暖をとるための石油ストーブを運びこんだ。

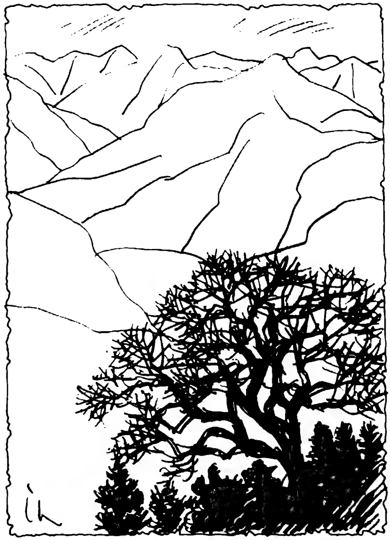
寝具を持ちこんだのは、ここへ泊りこむためではなかった。観察小屋で秋から冬、冬から春にかけて、徹夜でフ

クロウの動きを観察する間の、夜の寒さをふせぐためであった。

そして、一年のうち、二百日は、夜になるとここへやってきて、睡魔とたたかいながら観察に入った。眠気のために、シャッター・チャンスを逃がすこともしばしばあった。だが、小屋にこもって、照明のなかを音もなく飛びかうフクロウを見ていると、夜でも自然は眠らず、さまざまな動物や昆虫が生きるための営みをしていることがわかってきた。



20●鳥に聞け



撮影の前に、徹底した観察と調査をかさね、そして、さまざまな工夫をほどこして、はじめて撮影にとりかかる——。

はたから見たら、ひどく回り道をしたかのような方式が、宮崎学のそれまでにつくりあげた撮影のための道すじだった。

偶然にたよった生態写真ではなく、水準の高いものを、常時、とるためには、どうしてもその準備のための時間と、費用が必要だったのである。

学は、その準備の間に、ねらいを定めた被写体を、自分の眼と耳と、手ざわりでつかみ、教科書は自分でつくっていった。学者の書いた本や、名の知られた研究家の書いた

本は、参考にはしても、それほど期待して読まなかった。

中学卒の学歴しかもたない男が、傲慢とも思える行動を、あえてとりつづけたのは、なまじ先入観をもって、被写体の生態を見てしまうより、彼らの生活空間にとびこみ、仲間のように信頼されて、そこから汲みあげてきたもののほうが、たしかであったからだ。

一例をあげれば、フクロウの鳴き声の分析は、野鳥図鑑のどこにも書かれていなかった。学者の書いた研究書のたぐいにも、その種の解説はないようだった。

通りいっぺんの写真ではなく、彼らの生活空間へまで入りこんでとるためには、

「動物の言葉がわからなくて、いい写真がとれるわけはない……」

という理由になるわけだった。

学は、自らのこの考えに忠実であるために、愚直なまでに、観察を重ねて、ねらった動物たちの世界にとけこみ、信頼感をきずきあげて、（あのカメラマンだったら、オレたちの世界をとっても間違いない……）と思わせるまでにしたのである。

もちろん、野生動物たちが、そんなことをいうはずはなかった。が、彼らがそう思っているなと感じるまで、事前の準備をつみ重ねていったのだ。だから、撮影に出かけて

双眼鏡を忘れたのに気がつくと、カメラを持っていても、もういちど家へもどって、出直すことにしていた。

ぎゃくに、双眼鏡を持っているのに、カメラを忘れた場合、もどろうとはしなかった。双眼鏡では、撮影する術はなかった。それを家にもどろうともしなかったのは、その日はひたすら、とろうと考える被写体を見つづけていたからだった。

日本列島を北海道から沖縄まで縦断して、十五年の歳月をかけてとり終えたワシとタカは、この徹底した観察の末に成功した一例だった。

二十歳を越えて間もないころ、野鳥写真の大先輩、高野伸二に誘われて、北海道へオジロワシを見に行き、日本にすむ猛禽類をすべてカメラにおさめたい考えをあきらかにしていたが、この撮影行には、想像をこえた苦労と時間、闘いがつきまとった。

撮影旅行に出かけるときは、キャンプ道具と、撮影のための機材一式を車に積んで出かけた。ねらうワシやタカの生息する場所が、人里を遠くはなれた山のなかや、断崖、岩場、海辺、離島だったため、とにかく、車の行きつける場所まで行き、野営につぐ野営で、撮影を続行したのである。

二、三十メートルの木の上にブラインドを張ったり、数十メートルの断崖絶壁のテラ



どんな山奥にも入っていける改造された愛車

スに小さなテントを張って、四六時中ザイルで体をしばりつけ、身の安全を確保しながら、一週間もねばりつづけたことはしょっちゅうだった。

日本国内では、完全に姿を消したと信じられていたイヌワシの撮影行は、難業苦業の典型的な例だった。

日本を故郷に、巣をつくりヒナを育てるワシとタカの全種類を、自らの眼で見とどけ、観察をしたうえで撮影すると心に決めてから、学はあらゆるツテをたよって、イヌワシの情報を集めていた。

だが、イヌワシ発見の知らせは、待てど暮らせど、どこからもなかった。

「これは、本当に国内から姿を消してしまったかもしれんなァ」

学自身も、イヌワシはもう、日本には生息しなくなったものと、半ばあきらめかけていた。

そのまぼろしのワシを、はじめて目撃したのは、地元の中央アルプスの山中だった。白銀一色にぬりかえられた冬山の稜線スレスレに、雄大なつばさをひろげて、飛しょうする姿をしっかりと目におさめたのである。

学は、その一瞬、（あっ！　日本に生息する最後の一羽が、どこからかまよってきたんだな）と、思いこんだほどだった。

そのイヌワシには、十年ほどの間に、中央アルプスで二回ほど出会う機会があり、迷い鳥ではなく、この地にすみついた一羽であることを確認するまでになった。

しかし、遠くを飛ぶ姿を見せるだけで、撮影の条件はととのわぬ、一瞬の出会いにすぎなかった。

このあこがれのイヌワシが、突然、撮影の可能性のある対象となったのは、昭和五十四年の春であった。

同好の友が、上信越国立公園で、営巣を発見し、知らせてきてくれたのである。その人は、クマタカにあこがれ、さがしているうちにイヌワシらしい鳥の巣を発見したとのことだった。

しかし、一報があったときは、「イヌワシのような気もするが、クマタカのような気

がします。いちどおいでを願って見ていただけませんか」という判定依頼の意味もふくまれていた。

「イヌワシの巣が見つかった!?」

学もまた、半信半疑であった。

営巣が事実とすれば、写真の撮影も可能になろう。学は、はやる気持をおさえて、発見者のもとへたずねていった。

そして、けわしい山岳地帯へ案内されて、

「ほら、あそこの大岩壁の中腹のところに、巣がありますよ」

と、指さす。長さ一キロメートル、高さ百五十メートルというとてつもない大岩壁のくぼみのなかの、大きな巣をさししめされたのだった。

学と案内の人の観察する位置からは、七百メートルはなれていた。倍率の高い双眼鏡でも点にしかとらえられない遠い距離で、もどかしさいっぱいだった。学は、必死に鳥の種類を確定しようとあせった。その間に、大岩壁の上空を旋回していた一羽の真っ黒い大型の鳥が、疾風のようにまい下り、すぐ、また上昇気流にのって、まい上がっていくのが望見できた。

その反ぷくされる行動から、巣のなかにはヒナが生まれている可能性があった。気長に観察しているうちに、ヒナを守っているメスらしいものも、ときどき巣をはなれてまいあがり、同じように弧をえがく動作を見せている。

「ヒナがいるようだ……つばさの形からみてイヌワシらしいな。たいへんな発見になりそうですよ」

学は双眼鏡から眼をはなすと、興奮した声で発見者にそうつげた。

撮影をするには、イヌワシの警戒心をかいくぐって、もっと近くへ行かなければならない。双眼鏡でその候補地点をさがしもとめると、長さ一キロにおよぶ大岩壁であったが、巣の近くに、ちょっとした岩の出っ張りが見つけられた。しかし、その場所へ行くには、絶壁の上からザイルにぶらさがって行く以外に、近寄る方法はないようだった。

学は、ためらうことなく、あらかじめ用意をしてきた道具をそろえ、ロープづたいにその岩棚におりてみた。二畳敷ほどの出っ張りで眼下には、七、八十メートルくらいのそぎ落とされたような絶壁がつづいていた。

ロープにつかまり、および腰で見下ろすと、一瞬、頭がクラクラとして、谷底にすいこまれていくような錯覚をおぼえた。

双眼鏡で巣をのぞいてみると、フワフワした白い羽毛のヒナが二羽、メスワシの大きなつばさの下にいるのがわかった。

学は、二畳のこの岩棚を撮影の基地に決めた。野営のための道具や、食糧、撮影機材の一式を下ろし、小さなテントを張って身をひそめることにした。

テントには、望遠レンズのためののぞき穴が用意されている。身をテントにひそめたまま撮影できるというわけだった。

しかし、何日もここで生活するためには、炊事や、トイレのための準備が必要で、その場所をさがしてみたが、眼下に数十メートルの絶壁をひかえた危険な岩棚では、そんな場所があるはずはなかった。

だいいち学の体は、眠る間もふくめて四六時中ザイルでしばりつけてあった。その不自由な身で、せまい危険な岩棚の上を、歩きまわることはできそうにもない。しかたがなく彼は、貴重品の水は、口をしめらせる程度に使い、顔も、食器も洗わず、排出物は大も小も、ポリ袋をあてがってそのなかへすませるという法をとった。

学は、夢にまで見たイヌワシ撮影のために、生命の危険と隣り合わせで撮影をつづけたのである。

21●ハヤブサとの出会い



宮崎学のワシとタカのファイルには、ノスリ、オオタカ、ハイタカ、ツミ、チョウゲンボウ、ハチクマ、チュウヒ、チゴハヤブサ、サシバ、トビ、ミサゴ、オジロワシ、イヌワシと、十二、三種におよぶ猛禽の、見事な生態写真がおさめられていた。

撮影をはじめてからすでに十年の歳月はすぎていた。のこる種類は、クマタカとハヤブサ、沖縄の離島にすむカンムリワシだけとなった。

このうち、カンムリワシは、いままで営巣が発見されたことがなく、台湾あたりで繁殖しているらしいという説が、なかば〝定説〟となっていた。台湾が故郷であれば、日

本で生まれ育つ猛禽類とはいいがたい。
このような理由と、その生態になんの知識もなかったことから、当初、リストからははずされていた。
学のすむ伊那谷周辺で営巣も発見されているクマタカが、まだファイルにおさめられていなかったのは、ハヤブサとともにいちばん好きな猛禽類だったからだった。
彼は、クマタカを荒けずりで粗野な魅力をひめた野武士。ハヤブサを洗練され磨きつくされた貴公子の魅力にたとえていた。
野武士と貴公子——両極端の魅力をもったあこがれの猛鳥であれば、いちばん油ののりきったときに、自信にあふれた写真をとりたいと思うものだ。
現に、クマタカは営巣を発見して観察を深め、この鳥のもつ不可思議な生態をさぐり出していた。
その一つは、産卵の二十日前から、巣ごもりして、産座に青葉を敷いたり、抜き出したりして、湿気や温度を微妙に調節するという習性だった。
いま一つは、ヒナに獲物の肉をあたえはじめる初期に、親の鼻の穴からかなりの量の白っぽい透明な汁をポタポタ落とし、その汁と肉とをまぜてヒナにあたえているという

事実であった。

学は、この不思議なクマタカの習性は、

「鼻汁が肉を殺菌する作用か、ヒナに抵抗力をつけさせるなんらかの作用があるのではないか」

と考えたのである。

そして、クマタカに限らず、鼻汁を落とす習性は、ワシ、タカの仲間全般にあてはまるのでないだろうか……と類推したのである。

クマタカとの関係は、研究家も知らない、こんな事実の発見もあって、撮影の条件は着々ととのっていた。だがハヤブサだけは、その生息地がわからず、片想いのままに過ごしていた。

想いこがれていた恋人との出会いのような、ハヤブサとのランデブーは、昭和五十五年についに実現した。

その出会いの場所は、日本海に面した、海面から一直線にそそり立った、目まいがしそうな断崖においてであった。

学は、その感激のシーンは、『鷲鷹ひとり旅』のなかで、おさえた美しい筆致でつぎ

のようにつづっている。

一九八〇年、私ははじめてハヤブサの巣に近づいていった。目もくらみそうな絶壁で、ハヤブサは抱卵をしていた。海面から一〇〇～一五〇メートルの高さをもつ垂直の岩板だった。そんな岩壁が海面に向かっておよそ四〇〇メートル、まるで屏風となって海につきでていた。その絶壁の上部、海面から八〇メートルほどの岩棚で、ハヤブサは静かに卵を暖め続けていた。真下につづく海原は、冬の日本海だ。大きな波のうねりがつぎつぎに押しよせては、抱卵をつづける絶壁の基部にぶつかって轟音とともに砕けていった。

学は、この断崖絶壁のわずかな岩棚に営巣しているハヤブサの写真をとるために、九ミリのクライマーロープとカラビナだけをたよりに、慎重に垂直に近い岩場をおりていった。

一歩まちがえば、まっさかさまに大波のくだけ散る岩礁にたたきつけられ、三十余年の生涯を終えることは必至。気力と気合と自信だけが、細いロープとともに彼の生命を

つなぎとめているすべてだった。

潮風に当たっている絶壁は、以外にもろい面があって、ちょっとした油断が墜落につながっている。学は、慎重のうえに慎重を期して、一寸きざみに、手で岩をたしかめながらおりていった。手をかけた岩がポロポロとくずれ、ひっきりなしに、はるか下方の海面は飛まつをあげている。

そんな二本足の生きものを、ハヤブサは抱卵したままの姿勢で、鋭い眼で追っていた。巣までの距離が約四十メートルに近づいたところに、ちょっと足がかりのいい岩がせり出していて、巣を俯瞰するのにおあつらえの位置があった。

「よし、ここで撮影をしてやろう」

学は、やっとすわれるだけの空間に腰をおろすと、体をロープにしばりつけたまま、カメラをかまえて撮影のチャンスをねらった。

太い望遠レンズでのぞかれて、おくびょうな鳥だったら抱卵を放棄し、飛びさってしまうのがオチである。ところが、ハヤブサは、絶壁の闖入者を恐れる様子もなく、目の前でメスからオスへ、オスからメスへと抱卵交代をしながら、昂然と厳しゅくな親鳥としてのつとめをはたしているのだった。

「なんちゅう、度胸のいい鳥なんだろう」
戦闘機のように、空中の戦いのために、これ以上はぶくことのできないくらいに体型をととのえてハヤブサは、闘争心がおう盛と同時に度胸もよい鳥のようだった。
学は、パンと缶ジュース二本だけで、八時間もねばって撮影をつづけたが、その間にハヤブサは、海上を直進してくる標的を見つけて、一直線に立ち向かい、胸のすくような襲撃の一瞬を、見せつけてくれるのだった。
見通しのきく絶壁の岩場で、獲物を待ちつづけていたオスは、人間の肉眼でとらえられない、はるか沖合いを通過する標的をも、いち早く発見して、矢のような勢いでつき進んでいった。
そして、獲物ギリギリまで近づいたとみる間に、直前で急上昇し弧をえがくように反転。急降下してその鋭い鉄のような爪で獲物を一撃した。その一撃によって小鳥は即死し、海面に向けキリモミ状に落下をはじめた——と、ハヤブサはその獲物の下側にまわりこむように急反転をして、両あしでがっちり受けとめ、大きく羽ばたいて凱旋するという図式だった。
学は、八時間も断崖にへばりつきながら、その間に展開されるハヤブサの胸のすくよ

うな生き様を見せつけられ、この〝生ける戦闘機〟にますます思い入れを深めていくのだった。

ハヤブサの生息地の発見と、撮影が成功したことは、学の猛禽類の撮影行に、さらに大きな自信とはずみをあたえた。

その理由は、ハヤブサの生息地を見つけたのが、偶然の所産ではなかったからだった。同好の士と、記録を調べているうちに、昔ハヤブサがタカ狩りに重宝がられ、毎年、権力者に献上されたという事実を知って、

「昔いたのなら、いまでもいるのではないか」

と、現地へ行き、そこから営巣の発見へとつながっていったのだ。

十年ごしで、北から南へと、猛禽類を追いつづけていた学は、わずかな情報を聞くと、その場所へ行き、何日か観察をつづけて、一瞬でもその姿を目撃できれば、あとはその地の地形だの風の向きを調べ、その鳥になったつもりで想像をめぐらして、必然的に営巣の場所を発見できるまでになっていた。

いまや、宮崎学の観察と行動からみちびき出されてくるものが、教科書となっていたのである。

22●みのった少年時代の夢



猛禽類の最後のターゲットとなったカンムリワシは、スタート時点では撮影の予定に入っていない鳥だった。

沖縄が、アメリカから返還されていなかったことと、カンムリワシの情報があまりにも少なかったからだった。

しかし、沖縄が日本に復帰した以上、その島にすむカンムリワシを、なんとしてもとらなくてはならない。

正直いって、学のそのときの気持は、やっかいな撮影がまた一つふえてしまったということだった。少ない情報を集めてみると、カンムリワシは、離島の八重山地方のジャ

ングルにすむという。熱帯に近いそこには、おそろしい毒ヘビのハブや、えたいの知れない毒虫、植物が生い茂り、危険がいっぱいだという……。

信州の伊那谷に育った学には、熱帯圏にぞくするジャングルが、どのような場所か、かいもく見当もつかず、ただおそろしさを感じるのみだった。

しかし、カンムリワシの営巣はただ一度も発見されたことがなく、どうやら台湾あたりで繁殖しているらしい……というあいまいな情報しかなかった。

「営巣していなければ、行ったところでむだずらなァ」

学は、信州からはるばる、二千キロメートルもはなれた沖縄まで行って、撮影がからぶりになったのでは困ると思った。その一方で、

「待てよ……カンムリワシは本当に沖縄の離島を故郷にしていないのかな?」

と、うたがう気持をもった。

これは、昔からの学の考え方の基本だった。ある動物を撮影しようとするとき、研究者などの論文や報告は、一応の参考にしたが、頭から信じないことにしていたのだ。

野生動物を撮影するとき、机の上や活字で学んだことは、現場でおよそ役に立たない。まず、めざす動物の生活空間に足を踏み入れ、自分の眼と耳と手でたしかめてみないこ

とには、なにもはじまらないのである。
猛禽類をはじめ、数々の野生動物の撮影で、学は〝見たものが勝ち〟という体験を、いやというほど味わっていた。
その体験哲学から、現地へ飛んで自分の眼でカンムリワシのすむジャングルや、生態を調べあげ、撮影にとりかかろうと考えたのである。
沖縄行きは、ワシやタカを追いはじめて十五年目の昭和五十六年の冬、決行された。石垣島から西表島へ渡り、この島のジャングルへ踏み入って、カンムリワシの営巣の発見と、今世紀最大の発見といわれたイリオモテヤマネコも、あわよくば撮影してこようという魂胆だった。
出発前のイメージとして、西表島のジャングルが、うっそうとした、昼なお暗い大密林地帯と想像していたのに、着いてみると平たんな開けた島であることだった。
カンムリワシも、島の上空を飛びかう姿を目撃でき、
「心配したほどのこともない。巣なんかすぐ発見できるずら……」
と、ひどく楽観した気持をいだかせたものだった。
ところが、一足ジャングルのなかへ入ったとたん、内部はまったく視界がきかず、同

じような植物と、地形がつづいていて、うかつに入ろうものなら、樹海に迷いこんでしまって遭難する危険性のあることに気がついたのである。

樹海でまよってしまうと、リング・ワンデルンクといって、方向がわからず、同じところを何度もまわり歩いて、遭難する例がまれではない。

学は、そのおそろしさを充分知っていたから、とりあえず見通しのよいところをえらび、カンムリワシの生態的な行動パターンを観察することにした。

平坦なジャングルのなかで、高い場所といったら高い木の上しかない。学は、地上二十メートルくらいの木にのぼり、一日十時間くらい、くる日もくる日も、双眼鏡でカンムリワシの行動を追ったのである。

体は、木の幹にロープでしばりつけ、簡単な食事もそこですませた。一日の行動は、ひたすらカンムリワシの動きから眼をはなさないことであった。

無心で観察しているつもりだったが、ときどき、

(なんでおれは、こんな南の島まで来て、こんなことをしているのだろう……)

という想いが、頭をかすめることも一度や二度ではなかった。時間をかけてねばっていれば、いい写真がとれるという保証があるわけではなかった。ただ、生活するためだっ

たら、小器用に写真をとる方法も、知らないわけではない。

学は、そんな迷いが出たとき、予算がつかなければ積極的に研究に取組むことをしない多くの〝研究者〟たちに思いをはせた。

「あの人たちは、身ゼニを切ってまで、つっこんだ仕事をしない種族だ。おれは、自分でさがし、自分で調べて、それで写真をとってきた。ここでくじけてしまっては、いままでのおれが死んでしまう！」

学は、心のなかでそう自問自答してみると、安全地帯にいて、予算のワク内だけで仕事をしている〝研究者〟への猛烈な反発が、あらたなエネルギーとなって、ふたたび双眼鏡をのぞく眼に、力がこもるのだった。

「なにクソっ！　負けてたまるかッ！」

高い樹上で、思いきり大声をはりあげると、迷いがふっきれる。すると、カンムリワシの生態様式が、割り出されてきた。

それまで観察したところでは、カンムリワシの飛び方は、クマタカに似ていた。ただ、クマタカより尾が短く、つばさの幅が広いようだった。

このようなつばさの形と尾をしたワシやタカは、獲物を狩るとき〝待ちぶせ猟〟をす

る特徴があった。見通しのいいところにとまって、獲物の現われるのを根気よく待ち、不意におそうという捕食行動をとっているのだ。

学の下した判断は、カンムリワシにも的中しているようだった。

彼らは、カニやカエル、ヘビやトカゲの出そうな湿原、川の周辺の木の枝や、木の上にとまって、長時間も獲物の出現を待っていた。そして、発見と同時に、獲物の近くへ舞いおり、ちょこちょこと歩いていって、頑丈な足の爪と鋭いくちばしで、獲物をおそって殺し、食べているのだった。

「なるほど、カンムリワシは、クマタカやノスリの体形と捕食行動がそっくりだ……となれば、巣も彼らに似た方法で樹上に作っているにちがいない」

日本全国のワシやタカを、十五年にわたって追った勘が、その巣さがしにも的中したのだった。見当をつけてさがしはじめて間もなく、学は、日本では営巣をしないという〝通説〟があったカンムリワシの巣を、発見する光栄にかがやいたのだった。

学は、その感激の一瞬を、たんたんとつぎのようにつづっている。

「カンムリワシの巣は、ジャングルの沢すじにつきでた大木につくられていた。地上からはほとんど巣を見つけることが不可能な環境だった。しかし、その巣のありかを、私

は一発で見破ることができた。巣材としてもち込まれた枯れた小枝が三本ばかり、ツルアダンのからまった大木の陰に不自然に見えかくれしていたからである」

学がこのとき、たった三本の枯れ枝によって、巣をつきとめられたのは、それまで日本のワシとタカのすべてを観察し、営巣を発見、求愛から、子育て、家族関係、捕食のすべてにわたって撮影してきたおかげだった。

それと、四、五歳のころからの幼児体験のつみ重ねが、カンムリワシの巣づくりの環境、場所を割り出すための力強い後ろだてになっていたのである。

一つの巣が発見されれば、方程式の解き方がわかったようなもので、思いのほか簡単に、さらに二つの巣の発見につながった。

学は、さっそく、親鳥を刺激しないよう用心して、その巣の近くに長尺マガジンつき



野生動物をみつめる学の眼はやさしく鋭い

のカメラを仕かけ、ブラインドに身をひそめて、コードによる遠隔操作で、思いのままに抱卵からふ化、給餌、巣立ちまでの二ヵ月間を撮影した。

二メートルにもたっする猛毒ヘビのハブや、三十センチメートルもあるキシノウエトカゲ、長靴をはいていても、靴下のなかに入って血を吸うヤマビル。また、ブラインドのわずかなすき間から、つぎつぎに侵入してきて、ところかまわずにおそいかかるヤブカの大群に、おびえ、なやまされ、孤独にたえての二ヵ月間であった。

こうして、宮崎学は、日本で繁殖活動をつづけているワシとタカ十六種のすべてを、ついに撮影することに成功したのである。

十五年の歳月をかけての夢の実現であった。伊那谷の〝落ちこぼれ少年〟が、病いにふし、絶望のはて、自殺まで考えたあげくに、動物園で見たクマタカの威厳にみち、りん然とした堂々たる風格にうたれて、決意した撮影行であった。

この感激はいかばかりであっただろう。

学は、今江祥智をはじめ、全国にいるワシやタカのファンである知人たちの協力があって、はじめて達成できたよろこびをまずあげた後で、つぎのようにのべている。

まさに私は自分自身の〝賭け〟に勝った。体あたりで、手さぐりで、体で覚えていったワシやタカの生態的な知識が、結果として成功に導いてくれた。

もっとも、その過程で、私の幼児体験ともいえる伊那谷での幼年期の経験が大いに発揮されたことはいうまでもない。体がまるでサルのごとく軽く、三十メートルもの木でも平気で登ることができる。だから、クマタカのような巨木に巣をつくるタカにも接近できたし、イヌワシのように絶壁にすむ鳥に近づくための岩登りも可能だった……。

学は、小・中学生時代は、その野性味ゆたかな子どもだったために、落ちこぼれのレッテルをはられたが、教師からみてハミダシた部分が、いまの自分を生かしているすばらしい財産であると思った。

「名前と顔がちがうみたいに、人間の生き方は全部ちがうのだ。いまの学校教育のように、同じ型の同じ車に乗せて走らせていれば、同じような人間しか生まれて来ない。人は人、自分は自分なのだ。せっかく縁があってこの世に生まれてきた以上は、自分の生き方は、自分で方法論を見つけていかなければならない」

八十年人生の折返し点にようやくたっしたばかりの若さで、宮崎学はすでにこのような牢固とした人生哲学をきずきあげていた。

自分で自分の生き方をつくり出していくという人生は、どのような結果になっても、その責任は自分にあった。学は、苛酷な撮影をつづけるなかで「自分は畳の上では死ねないし、死なない！」といった覚悟も固めていた。

野生動物とつき合い、きびしい生存のための闘いぶりを、レンズを通して見つめていると、人間もまた動物にほかならず、動物である以上は、大自然の摂理からはのがれられないと観念するまでになっていた。

生きものの世界は、必要がなくなったり、生命がつきたら、新しい生命の誕生のためにさらわれ、役立っていく。

宮崎学は、この輪廻転生の人生観、自然観のなかで、これからの仕事をひろげていくべく、じっくりと新しいテーマの模索に入った。

塩澤実信（しおざわ みのぶ）
1930年長野県に生まれる。出版社の編集局長をへて、東京大学新聞研究所、および日本児童教育専門学校講師等を歴任。日本出版学会会員、日本ペンクラブ会員。著書に『雑誌記者池島信平』（文藝春秋）『雑誌をつくった編集者たち』（廣松書店）『出版社の運命を決めた一冊の本』（流動出版）『ベストセラー感覚』（論創社）『ものがたり北海道』全10巻（理論社）など。
住所＝東京都東村山市美住町1-11-30

シリーズヒューマンドキュメント
動物と話せる男
宮崎学のカメラ人生

NDC915
B6判 19cm 190p
1989年6月初版
ISBN4-652-01841-X

著者 塩澤実信
発行 株式会社 理論社
発行者 鈴木良司
〒162 東京都新宿区若松町15-6
電話 営業 (03)203-5791
出版 (03)203-5794

1990年7月第11刷発行

制作 P&P/山村光司
編集 DAI編集室/大石好文
印刷 加藤文明社/方英社/よねむら写植
製本 誠製本

シリーズ
ヒューマンドキュメント

動物と話せる男
宮崎学のカメラ人生
塩澤実信
信州・伊那谷に住む動物写真家宮崎学の少・青年時代をえがき、人間の個性とは何かを問いかける。

かんからさんしん物語
沖縄戦を生きぬいた子どもたち
嶋津与志
一転して戦場と化した沖縄で、父の形見のさんしん(三線)を背負い砲弾の下を逃げのびる少年たち。

白樺伝説
この愛の教師たち
はまみつを
白樺派の教師に学んだ少女の目をとおして、子どもへの愛と自由教育に情熱をもやす教師像を描く。

北の逃亡者
中国人強制労働の悲劇
たかしよいち
中国から連行され、北海道で強制労働を強いられた王英仁は、終戦を知らず13年間山中をさまよう。

ふみ子の海（上・下）
ある盲少女の青春
市川信夫
三歳で視力を失ったふみ子は、八歳で鍼按師の道へ。たくましく賢く生きる盲少女の感動的な半生。

遊べ、あそべ！
おじいさんの腕白時代
高瀬湊
自然の中の遊びを失ってしまった現代の子どもたちにおくる、昭和ヒトケタ世代からのメッセージ。

釧路湿原
北海道カウボーイ物語
朽木寒三
北海道の大自然を背景に、馬に魅せられた昭少年のくりひろげる波乱と冒険にみちた感動のドラマ。

脱出
満州開拓団壊滅の記録
代田昇
国策により参加した満州開拓団が、敗戦とともに遭遇した〝死の行軍〟の史実を、赤裸々にえがく。

ビルマの砂
失われた青春のときよ
幅房子
兄は戦場へ、そして一握りの砂となって帰還した。聖戦の名のもとに抹殺された青春へのレクイエム。

シリーズ
ヒューマンドキュメント
刊行予定

かんからさんしん物語
沖縄戦を生きぬいた子どもたち
嶋　津与志

白樺伝説
この愛の教師たち
はま　みつを

北の逃亡者
中国人強制労働の悲劇
たかしよいち

ふみ子の海（上・下）
ある盲少女の青春
市川信夫

美しく平和な島沖縄は、一転して戦場と化した。父の形見のさんしん（三線）を背負って、砲弾の下を逃げのびる少年たち。

大正初期の白樺派の運動は、ひろく学校教育現場にまでおよんだ。子どもへの愛と自由教育に情熱をもやす教師像を描く。

突然、中国の農村から連行され、北海道で強制労働を強いられた王英仁は、終戦を知らず十四年間北海道山中をさまよう。

三歳にして視力を失ったふみ子は、貧しさから八歳で自ら鍼按師の道へ。たくましく、賢く生きる少女の感動のドラマ。

ISBN4-652-01841-X C8395 P1200E 定価1200円(本体1165円)



伊那谷遠望　撮影=宮崎　学